
不条理には殺人鬼を

黎音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不条理には殺人鬼を

【Nコード】

N9210M

【作者名】

黎音

【あらすじ】

目が醒めたら俺は死んでいた。そして女神によると“ネギま！”の世界にチートとして転生させてもらえるらしい……………なんてテンプレ。

俺が選んだのは殺人鬼としての力。この力でどれだけ物語に介入出来るかね。

さあ、行くぞ。

生きているなら神様だって殺してみせる。

ああ、そうそう。作者が吐き出す物語はたぶん駄文だぜ？まったく、蜘蛛が自分の出した糸に絡まるなんて恥ずかしすぎやしないか？

こうして俺は力を手に入れた（前書き）

やっちまった。

完結してない作品があるのに、また新しいの書きちまった。“リリカルなのは”の方を主軸に書きますので、こっちの話はナマケモノみたいに遅いと思います。

こうして俺は力を手に入れた

「此処は………何処だ？」

俺は見知らぬ白一色の世界にいた。

いや、識^しつてはいる。

知識として脳に入っているのではなく、経験として魂に刻まれている。

そう、此処は——死んだ者、創^うまれた者が集う世間一般で言う『天国』だ。

つまり、俺は死んだのか。

やれやれまたあの世界に転生か、地獄行きかを決めてもらうのか。出来るなら地獄行きで決まってほしいがな。あんな生温い世界には飽きた。

「残念ながら出来まつせーん！」

目の前に頭が悪そう、いや顔も悪い女神が現れた。

「待て待て、私はめっちゃ美人だつての！」

「こんな文章だけの世界で外見が分かるかよ。やっぱり馬鹿だな」

「物語のキャラがそんな事言わない。あ、私もか」

「ワイディングロードは肌だけにしろ。さつさと話を進めやがれ」

「うわ、聞きました奥さん？この人から脱線させといてよく言いますよね」

昼のワイドショーに出て来る渋いオランウータンみたいな司会者つ

ばい口調で話すなよ。
意外に俗物だな。

「本題に入るけど、貴方には転生してもらいまーす」

「ふーん、で？」

「リアクション薄いなあ。世界は『ネギま！』の世界でチートにしてあげるわよ」

なるほど、別世界とは無限に広がった可能性のある世界か。パラレルワールド

そしてチート化……よくあるテンプレだな。

魔法のある世界に魔法使いとして転生。つまらねえな。

「ほれほれ、どんな事でもいいんだぜい」

「そうだな……魔力はあまりなくてもいい。身体能力をMAXにして、型月の『しき』の能力と技ができればいい。あと、刀剣限定の投影魔術を使えるようにしてくれ」

『』には使用限定をかける。

ついでに魔眼殺しは必要ないものとした。でないとネギ坊主と被るからな。

「微妙なチート具合ね」

「同じ土俵に立つためだからな」

なるべく物語を壊さないように動きたいし。

「生まれる場所はどうする？」

「物語に介入出来るようにしてくれれば何処でも」

「了解。んじゃ、目を閉じて」

言われたまま目を閉じると、何か温かいモノに包まれたような感覚を感じた。

さあ、行くぞ。生きているなら神様だって殺してみせる！！

こうして俺は力を手に入れた（後書き）

おいおい、俺が死んだ理由はいつたい何だっただ？知らないままじゃ次の世界で殺せない。

そもそも俺が生前どんな人間だったかも分からないとはな。なんて、最高だ（つまらない）。

作者の奴は何も考えないからな。これからどうなるのやら。

ま、どうだっていいけどな。夢にしろ現にしろ、神様ってのは気まぐれで困るよな。

こんな介入かよ（前書き）

なんて、テンプレな介入だよ。

こんな介入かよ

ネギま！世界に転生した俺は10歳の頃の姿をしていた。
そして、何故か京都の山にいた。

時系列の確認をしたあと、住む場所や戸籍をどうにかしないとな。
あの女神が用意しているとは考えにくいから。

何かないかと着ている服を確認すると、コートの胸ポケットから手紙と保険証、遊んで暮らせるだけの額が入った通帳が出て来た。

『アフターケアで戸籍とお金贈つとくから。あ、感謝して土下座しなさいよ』

感謝はするが土下座なんかするか。
そもそも、子供の姿で家が借りられるかよ。やっぱり馬鹿だな。

さて、此処から物語に介入するにはどうするかね。

京都で出会ったとしたら近衛家、桜咲刹那のどちらかだが、どうやって接触するか。下手を打って正体をさらけ出す訳にはいかない……
……どっちに接触しても危険だな。

「……………」

誰かに見られている。
敵意や殺気は感じられないが、見られているのは気持ちいいものではない。

コートの中に手を入れ、見ている奴からは見えないように短刀『七

夜』を投影する。

呼吸を合わせ、一気に見ている奴に肉薄して背後に投げる。

閃鞘・一風

そのまま首筋に七夜の刃を押し付け、

「何者だ。さつきから何を見ている」

「あたたたた。年寄りは大切にせんかい」

俺を見ていたのは麻帆良学園で学園長をしている近衛近右衛門だった。

とりあえず刃を首筋から離す。

まだ何を考えて俺を見ていたのか分からないから、七夜は破棄しないで持っておく。

「生憎と見物料を払わない客は嫌いだね」

「物騒な子供じゃのう………何でこんな山奥に一人ど居るんじゃ？」

「それ言ったらあんただってそうだろ？」

元々口調が悪いから嫌な印象を与えてるだろうな。

敵意を感じないので七夜を破棄。

自己紹介をしておいた方がいいか？

さつき通帳に書いてあった名前は、

「俺は両儀志貴だ。翁、あんたは？」

知ってるけど一応な。

つか、直死の魔眼の魔眼を使うからってこれはないだろ？やっぱり俗物。

「ワシは近衛近右衛門じゃよ」

「翁、あんたに頼みがあるんだが。子供の戯れ事と取ってもいい」
「言ってみい」

「名ばかりの後見人になってくれ。金があるのに親が居ないから家が借りられない」

あ、凄い驚いてる。

つか目が点になった人間って直に見るとキモいな。

「親はどうしたんじゃ」

「知らん。通帳にかなりの額が入ってる事はたしかだ」

「……………じゃったらウチの子に——」

「だが断る」

名ばかりの後見人になってくれと頼んだのに、何でそうなるんだ。
だいたい翁の家はデカすぎて落ち着かない。

「俺は家が借りられれば一人で生きていける」

「しかしじゃな——」

ああ、もう五月蠅い翁だ。

直死の魔眼発動。

世界に点や線が見える。これが、死の世界。

確かにこんな世界を何の魔術対策していない遠野志貴が見たら、壊れるか発狂するかだわな。

七夜を投影し、近くにあった岩の死の点を突く。すると岩は霧散んだ。

これが脅しになるとは思わんが、

「こんな化け物を飼う気か？中から殺されるぞ」

「魔眼持ちじゃったか、尚更ウチに連れて帰らんといかなかった

わい。お前さんの力は危険じゃ」

「だから？」

「ワシが力の使うタイミングとかを教えてやるう」

「必要ない」

そんなもん知る必要があるか。

俺はこの能力で殺人鬼にはなるが、そうそう人を殺したりはする
よ。

「だったら妥協案を出そう。ワシの目の届く範囲におればよい」

「それは何処から何処だ」

「それは追い追い決めるとしよう。さて、まずはワシの家に連れて
帰らんな」

「なっ！？」

体が……動かない。

しまった、捕縛の魔法か金縛りか。魔法に対する抵抗もMAXにし
ておけば良かった。

そのまま俺は翁の手によって近衛家に連れて行かれた。

それから8年とちよつとの月日が過ぎて俺は18歳になった。

近衛家で数年過ごして翁の言う通り行動し、ようやく翁の目から離
れられるようになったのだが、翁には勝手にされた事とはいえ礼が
ある。だから翁には逆らえなくなってしまった。

ああ、そうそう。

木乃香と刹那に出会いはしたがあまり関わらないように過ごした（後々動きにくくなるかもしれないから）事を記す。ついでに言っと三つ年下だった。

そして俺は今世界をバイクで見て回る旅をしながら、この世界と別世界がリンクしてないかを調べている。

まずはロンドンに行ってきたが、型月の世界とリンクしてない事が分かった。嬉しいような悲しいような。

他にもイロイロ調べたが、どうやらこの世界はネギま！オンリーの世界らしい。俺以外のイレギュラーが出ないのは嬉しいかぎりだ。

「ふう、ちよつと休憩」

朝からバイクで走り続けたから疲れた。

ガソリンは、まだある。

次は何処の国へ行くかな……………アメリカ辺りに行ってみるか。

なんて考えていたら空に白い燕が飛んでいた。

白銀のように白一色。

燕は俺の方へと来るなり姿を一通の手紙へと変えた。裏には翁の印が押してある。

ペーパーナイフを投影して封を切る。

『志貴、いきなりの手紙ですまんのう』

始まりはそう書いてあった。

いきなりの手紙、それも式を使つての伝言だから何かあったのか？

『再度いきなりですまないのじゃが、日本へ帰って来てワシの話を

聞いてほしい。急がなくてもいいが、とにかく帰ってきてほしいのじゃ」

手紙はそれで終わっていた。

急がなくてもいいが、とにかく帰ってきてほしい……………何かあったみたいだが、急用ではない。

だけど無視出来ない事が起きそうだから俺を呼んだのか。

仕方ない、日本に帰るか。

日本に帰った俺を待っていたのは、翁とネギ坊主だった。そういや、木乃香達が三年に上がってる時系列だからネギ坊主がいるのか。

「両儀志貴だ。好きに呼んでくれてかまわない」

「あ、僕はネギ・スプリングフィールドです。僕の事も自由に呼んで下さい」

まさか、此処から介入という事か。

季節は春。

桜の散り具合からするとエヴァンジェリン事件はまだ解決していないか、始まっていないかな。

「志貴にはネギ君の補佐をしてもらいたいのじゃ。先生としても魔法使いとしても」

「分かった」

「給料もしつかり出そう」

別に金はいらないんだがな。

こっちとしては介入出来るだけでいい、なんて言えないけど。

「両儀さんも魔法使いなんですか？」

「違う。俺は殺人鬼だ」

「ええっ!？」

うんうん、そういうリアクションする餓鬼は好きだぞ。

涙目になっているネギ坊主を見てるとサドっ気がそられるな。つ
い、殺したくなる。

「こらこら志貴。ネギ君が驚いてるじゃろうが」

「正確には“直死の魔眼”っていう魔眼持ちだ。全てのモノには発生した瞬間から予め決まっている崩壊の時間、つまり『死期』が内包されている。俺はその死を情報として魔眼を通して視えるんだよ………要するにあらゆるモノを殺せる眼を持っているんだ」

長文の説明なんか疲れるぞ。

死の具現、直死の魔眼持ちはその化身だ。

「死神、みたいですね」

「おいおい。何を聞いていたんだ？俺は死神なんて綺麗なもんじゃない、ただの殺人鬼さ」

「という訳で志貴、ネギ君の補佐を頼んだぞい。副担として頑張ってくれ」

「了解っ」

学園長室を出てネギ坊主と話しながら、俺が受け持つ(?)クラス

名簿に目を通す。

分かつてはいたが、木乃香と刹那がいるな。

やれやれ、俺がネギ坊主の補佐ねえ。蜘蛛に泳げって言ってるもんだぜ、それ。

「あの、両儀さんは学園長先生とどういう関係なんですか？ずいぶん親しいみたいです」

「身寄りのない俺を拾った、そんな関係だな」

「……………すみません」

「別にいいさ」

自分の過去を思い出させちまったかな。

しかし、そういうのを過去だって認めないと前には進めないんだぞ？引きずるなとは言わないが、囚われるな。

まあこれも言わないけど。

3 - Aに着いた。

何か凄い騒いでるが、どこから聞き付けたのかね。特に朝倉辺りが。

ドアには黒板消しが挟んである。

さあ、どういう行動を取る？

1・受け止める。

2・喰らう。

3・ネギ坊主を先に行かす。

せっかくだから俺は4番を選ばせ！

ガラッ ヒュッ ボフッ スタスタ

黒板消しを頭に乗せつつ、

「今日からこのクラスの副担をする事になった両儀志貴だ。趣味はバイク、特技は機械イジリ。何か質問は？」

「あの、先生」

「発言する時は手を挙げなさい大河内アキラ」

「すみません。あれ、何で私の名前を？」

「今さっき覚えた。それで質問の内容はどんなのかな？」

「頭の上の……………」

なるほど、黒板消しの事を言いたいのか。
だいたい犯人は分かっているが、いぶりですか？

「頭の上……………黒板に付いたチョークの粉を落とす役割を持つ黒板消しの事か？ちなみにラールとも地域では呼ばれているな。ふむ、トラップとして使ったからか中々に粉が表面に付いているみたいだ、粉が鼻に入って凄くムズムズする。ああそうそう、知っているか？教師という職業はこの黒板消しとチョークから出る粉末のせいで、肺をやられて辞める人間が多いみたいだぞ。これで私の教師人生はどれだけ短くなっただろうな」

あゝ、話し疲れた。帰りたいね。

「…………ごめんなさい…………」

鳴滝姉妹と春日美空が立ち上がって頭を下げた。やっぱりこいつらだったか。

それから俺は皆からの質問をのりくらしと解答していった。

一瞬、エヴァンジェリンからの視線を感じたが無視しておいた。そ

のうち接触するとうよう。

あー、やっぱ若い奴らのテンションについていけない。特に女子供。さてさて最初の殺し合い（デート）の相手は吸血鬼か。これは、俺が殺人鬼だからか？

まあ……… 内容によつては“殺せ”って事だよな？

こんな介入かよ（後書き）

やれやれ……よくあるテンプレな介入だ。つまらない。

誰から殺すべきか。

でもネギ坊主の補佐役の俺が殺すとアレだよな。殺人鬼に殺すなら、息するなって言ってるもんだぜ？

まずはこっち側か（前書き）

あゝあ、日本じゃ殺しにくいったらありやしねえ。これじゃ蛇の生殺しだ

まずはこっち側か

志貴 side

チュンチュン

さて今日も一日、らしくない補佐の仕事を頑張るとするか。そろそろ茶々丸との戦いがあるはずだしな。

愛車のバイク——“暁”のエンジンを回す。

こいつが俺の乗るバイクだ。

フレームはホンダのDN-01だが中をだいぶ弄っており、1100cc、水冷3気筒DOHC12バルブエンジンに変更してクラッチ操作も付けた。カラーリングは滴るような紅。もちろんマフラーの改造はしていない。

気が強くて中々言う事を聞いてくれない相棒だが、機嫌を取りさえすれば最高の気分にしてくれる相棒だ。

愛用のメットを被る。

アクセルを開けて走り出す。

最初はジャジャ馬っぷりに困るが、すぐに機嫌を直して本来の良さを教えてくれる。

スピードを無理に出す必要はない。普通に流すだけでも暁の良さは伝わってくる。

本当にバイクが好きだよな。

バイクから伝わる鼓動、排気音が奏でる音楽が、吹き当たる風が心地良い。

このままサボって何処かに走りたいな。この時期なら海沿いを走れば潮風が気持ち良いだろ。

けどそういう訳にはいかず学園へと向かう。

それにしてもこの光景は凄いな。

目の前には大量の生徒達が己が校舎に向かうべく走っている。路面

電車やローラースケートを使っている生徒もいる。
暁の速度を落しながら生徒間を走り抜く。

キキッ

暁から下りて靴箱に向かおうとしたらタカミチと出会った。

本名はタカミチ・Ｔ・高畑。ネギ坊主が来るまで刹那達の担任をしていた。こっちが年下にもかかわらず呼び捨てにしていると言う、あまり分らない男だよな。

「中々カッコイイバイクに乗ってるんだね志貴」

「そりやどうも。何か用か？」

「つれないね。ネギ君をしっかりと補佐してくれよ？」

「翁にそう頼まれたんだ。しっかりとするさ」

「僕からも頼むよ」

「…………言われなくとも」

それだけ言ってタカミチは職員室へと戻って行った。

ネギ坊主はやはり老若男女問わず愛されてるな。俺には関係ないからどうでもいいが、刺されても知らんぞ。

タカミチと戦うと、まず勝てないな。まだまだ俺も修業しないといけないか。

それから靴箱へ向かうと、ネギ坊主がエヴァンジェリンに言われて逃げ出すシーンに出くわした。

なるほど、今日の放課後に茶々丸戦という事か。

「聞いていたのか両儀志貴？」

「両儀先生？」

気付かれていたのか。

流石は吸血鬼の真祖とでも言おうか。型月の吸血鬼とはどう違うのかね。

「貴様が何者かなんて興味ないが、私達の邪魔はするなよ」

「学園長にネギ坊主の補佐を頼まれてるからな。しないとは言えないな」

「ふん、私達に関わって怪我をしても知らんぞ」

「心遣い痛み入るが、無用だ」

確かこの後に二人は授業をサボるんだっとな。

「意味ないと思うがちゃんと授業は出るよ」

そう言いながら二人の頭をすれ違い様に撫でて職員室に向かう。後ろで何か言っていたみたいだが無視だ無視。さてさて、これで介入する手立ては出来た。後は放課後まで授業か。

放課後。

俺は七夜の暗殺スキルで気配を消しながら、茶々丸を追い掛けるネギ坊主達を尾行している。

やはりネギ坊主は明日菜と契約したか。

「……………」

直に見ると本当に茶々丸はロボットなんだな。いや、機械と言うよりも人造人間と言った方がいいだろう。

ガイノイドを造るだけの技術を保有するこの学園は異常だというのに、何故にここまで受け入れられているのだろうか。
解体したら何色をしているんだろうな。

おお、ロケット噴射。

それに人助けをするなんて優れたAIじゃないか。

この学園は学園都市じゃないよな？

あれほど科学が進んでる訳じゃないが、これだけの有り得ない。超がもたらしたのか、葉加瀬が考えたのか、どちらにしても前の世界からしたら有り得ない。

茶々丸が教会へと向かい始めたので先回りして教会の屋根で待機しておく。

これからどう立ち回るか。

茶々丸を助けてネギ坊主を諷めるのか、それとも今回は敵に回るのが、味方になるのか。

1番物語を変えないですむのは諷めるなんだよな。だが、俺の言葉でネギ坊主が反省するかどうかだよな。

……………諷めずにただ茶々丸を助けるだけにしておくでしょう。持ってきておいたフード付きのコートを羽織り、顔には狐のお面を付ける。

こんな時用に持ってきてきいて正解だった。だけど何で投影魔術を刀剣に限定してしまったんだか、限定しなければこれも投影出来たのに。

「……………ネギ先生……………」

揃ったか。

原作とおりにまず明日菜から攻めた。

素人にしては中々筋が良いが、インパクトの瞬間に目を閉じるのは

改善すべきだな。

ネギ坊主の周囲に光弾が集まると同時に屋根から跳び下りながら七夜を投影し、魔眼を解放。一息で茶々丸の前に立つ。

「魔法の射手連弾・光の11矢！！つてええ！？」

驚いているが既に魔法の射手は放たれている。それを全て斬り裂いて殺す。

いきなり現れた第三者の俺を警戒してか、明日菜がネギ坊主を庇うように立つ。

茶々丸を俺の背中に隠すように立ちながら対面するが、まだ戦闘経験が少ないのか向こうはかなり隙だらけだ。これなら簡単に逃げ出せる。

我が骨子は捻れ狂う。

偽・螺旋剣を投影出来た。

矢として使われる為にドリルの形状をしているが、元々“剣”の属性を持っているからだろうか投影出来たのは。

それを無造作に投げ、壊れた幻想を使い爆発させて攻撃兼煙幕に使う。互いの視界を奪ったのを確認して茶々丸を抱き抱えて戦線離脱する。

やはりロボットだから想像よりも重い。

身体能力がマックスだが、魔力で強化して能力の底上げをして駆ける。

とりあえずエヴァンジェリンの家まで一目に着かず茶々丸を運べた。
ネギ坊主には気付かれなかったよな？

「助けてくれてありがとうございます両儀先生」

やっぱり茶々丸には気付かれていたか。ロボットを騙すのは難しい
かとも思っていたが、断定されるとは思わなかった。
お面を外す。

「いつから気付いていた？」

「抱き抱えられた時に体温、骨格その他もろもろから判断しました」

そんな科学的にされたら断定出来るか。

「どうして助けてくれたんですか？」

「俺はネギ坊主の補佐だが、お前達の副担でもあるからな」

本当の事を言っても信じてもらえないだろう。それに殺すのは俺が
する事でネギ坊主がする事じゃないからな。

さて、エヴァンジェリンに見付かる前に退散といこう。見付かった
ら何言われるか分からないし。

「それじゃあな」

「本当にありがとうございます」

「礼を言っただけで済んだんじゃない」

「そうですか」

気を付けていないと気付かない程の薄い笑みを茶々丸が浮かべてい
た。やはりロボットと言うよりガイノイドだよな。

原作とおりに進むならネギ坊主は明日、自分のした事に悩んで一時

期逃げ出すはずだが………俺はどうするか。
どちらからも接触がなければバイクでこの辺りの地理を確認しておくか。殺しやすい場所の確認やら一目に着かない場所とかも調べておきたいし。

次の日。

起きるなり朝メシを手早く造り稚拙なリズムを刻む腹を満足させ、
曉に乗って街へと繰り出した。

しばらく走って街を観察した結果、此処は本当に日本か？という考えに至った。街並みとかはまあいいんだが、ロボットとかが普通に歩いてるのを見て日本だなとは思わないだろ。

走り続けたので少し減った腹を何とかしようと考え、ワイディング
ロードを左折したところカフェでエヴァンジェリンと茶々丸が寛いでいた。

近くに曉を止めてコーヒーを貰う。
そのまま二人の方へと行くとエヴァンジェリンに露骨に嫌な顔をされた。何かしただろうか？

「何故わざわざ此処に座る」

「先日はありがとうございます両儀先生」

「ん、だからもうその事はよせ」

まだ礼を言う茶々丸の額を叩く。

先日の事を聞かされてないのかエヴァンジェリンが面白くないといった顔をしている。可愛い顔が台なしだな。

「先日何があつたのだ」

「ネギ先生に襲われたところを助けてくれたのです」

言わなくていいのに。

ほら、エヴァンジェリンの顔がまた険しくなってるじゃねえか。

「何故茶々丸を助けた？お前はばーやの補佐をしているんだろう？」

「ただの気まぐれだ」

「そんなタマか。訳を話せ」

流石に600以上生きてる吸血鬼を騙せやしないみたいだ。だが、
本当を言ってもな。

「結果として見るなら俺はネギ坊主の味方だが、過程はどうなんだろうな」

「なるほど“結果”は味方か。ならば過程では私達の味方にもなる
と？」

「それでネギ坊主にメリットがあるならな」

此処のコーヒーは中々美味しいな、俺のご用達にでもするでしょう。

喫茶店で思い出したが、ランサーやジョージ店長がやってるアーネンエルベに行ってみたいぞ。何とかならないものだろうか。

所詮は戯事。

「……………お前は何を考えてる」

「世界は英雄の息子に期待して重荷を背負わすもんだな、とか」

「それはネギ先生の事ですか？」

考えれば分かる事だろ。

必要な事を全て話すほど俺は優しくないつもりだぞ。優しく接して

おいて殺す、なんてのはあるがな。
カップの中が空になったので茶々丸達の分もまとめて清算する。――
応先生だからな。

「じゃーな」

エヴァンジェリン side

じゃーな、それだけ言っただけ奴は何事もなかったかのように帰って行った。

奴は状況に応じて私達の仲間にもなると言っていたが、結局はぼーやの為に動くとなると私達をぼーやの栄養剤にでも使う気だろう。この私を栄養剤扱いとは……ふん、どこまで先を考えている。奴は私の足元にも及ばないだろうが、何だこの嫌な感覚。

「茶々丸、作戦通りに動くついでで構わん。両儀志貴について調べられるだけ調べろ」

「分かりましたマスター」

さて、何が出て来るのか。

どちらに転んでも嫌なモノしか出ない気がするがな。

まずはこっち側か（後書き）

はあ、つまんねえ。

このまま進んでも誰も殺せやしない。原作ブレイクしたい気がするんだが、それじゃどんなイレギュラーが出るか分からんな。

殺す（イレギュラー）か殺さない（原作通り）か。

どっちにしる物語は進むんだが。

……殺そうとしたら物語の修正力が働くのか？ だったら殺そうとすべきか？。

やれやれ、いつになったらまた殺せるのかね？

決戦……俺に出番なくね？（前書き）

マジで出番ねえ……俺って主人公だよな？

決戦……俺に出番なくね？

志貴 side

今日も暁に乗って学校へ行く。

いつも通りの風景、人の波、これを見る度に酔って殺したくなるが鋼の自制心で抑え込む。

暁を駐車場に停めて靴箱に向かう途中でネギ坊主と出会う。長瀬楓に元気付けられた翌日だからやはり、その顔には笑顔が張り付いている。子供の無邪気な笑顔……殺したくなってくるな。

「あの、どうかしました？」

「元気そうだな、と思ってな」

「もしかして心配してくれたんですか？」

「さあな」

それにしてもネギ坊主と一緒に歩いていると私まで奇異の目で見られるな。やはり子供先生というのは、珍しいんだろう。

教室のドアを開けると元気そうな顔がこっちを向いてくる。その清々しい笑顔……若いていいねえ、殺したくなる。

「おはよう」

「おはようございますっ！エヴァンジェリンさんいますかっ！？」

近くで叫ぶなよ。あー、耳がキンキンする。

「あー、ネギ君おはよー」

「エヴァンジェリンさんならまだ来てないですが」

「へ、あ……そうですか」

「何や風邪でお休みするて連絡が……」

そう言つて和泉亜子がプリントを渡してきた。そこにはパソコンで書いたのか、機械的な文字で“風邪を引いたので休みます”と書かれている。

こんなイベントがあつたな。

「うーん……………よしっ」

教室を出て行こうとするネギ坊主の頭を掴んで無理矢理止める。確か原作ではこの後見舞いに行くはずだが、担任がサボるのはいかならう。

「な、何するんですか？」

「担任が授業をサボる気か？今日授業が入ってないから私が行つてくる。渡しておくのはあるか？」

「う……………じゃあ、これをお願いします。ちゃんと渡して下さいね」

「だったらしっかり授業をしるよネギ先生」

先生にアクセントを置くとネギ坊主はうなだれた。全く自覚なしとは、先生としての自覚はしっかりと持っておけよ。魔法使いであると同時に前回は先生だらうが。

果たし状を受け取る。

やれやれ、明日ようやく決戦になるのか。俺、出番ないよな。この物語の主役だつてのに。

学園都市内の桜ヶ丘4丁目29……ここか。

呼び鈴を鳴らして客が来た事を知らせるがエヴァンジェリンは寝ているのか、茶々丸は居ないので反応がない。

ドアに手をかけるとキィイ、と開いてしまった。滅多に人は来ないだろうが鍵はしっかりしておけよ。

家の中は外見通りの中身であちこちに人形が置いてある。ホラー系統よりもファンシー系統の人形が多い。

それよりも、

「誰も居ないのか？」

「両儀先生でしたか。おはようございます、どのような御用ですか？」

「エヴァンジェリンが風邪という事でネギ坊主の代わりに見舞いに来たんだが、人じゃない者が風邪を引くのか？」

原作では風邪の他に花粉症まで患っていると茶々丸が言っていたが。

「ふん、引く訳がないだろう」

声のする方を見るとエヴァンジェリンが階段の手摺りに腰掛け、こちらを見ていた。強気なところ悪いがそんな顔が赤くて呼吸が不安定だと信じられないぞ。

とりあえずネギ坊主から受け取った果たし状を渡す。それを読み終えるなりエヴァンジェリンは倒れてしまった。

「やれやれ、本当に風邪を引いてるんだな」

「はい。その他にも花粉症を患っています」

倒れた小さな少女を抱き抱え、2階にあるエヴァンジェリンのベッドへ運ぶ。

ここまで体調悪いのに無理矢理出て来るなよな。迷惑にしかすぎん。

「こうしていると只の女の子だよな」

少なくとも百年以上生きてる吸血鬼には見えない。不老不死なんだからそう見えるんだが。確か今の封印されてる状態だと本来の10歳の少女の体と何ら変わらないんだっただか？

「先生、私は今からツテのある大学病院で良く効く薬を貰って来ますので、その間マスターを見てもらえませんか？」

「今は先生だからな、それぐらいならしてやるさ」

「ありがとうございます。なるべく早く帰ってきますので」

そう言つて茶々丸は出て行つた。

さて、まずは濡れタオルを用意して頭の上に乗せるとしよう。勝手に家の中を歩き、風呂場から桶とタオルを持って来て程よく絞つて頭に乗せる。

冷え。タとかがあればそつちが良いんだが、そういうのは置いてないんだろつな。

「み、水」

水と言つたが、エヴァンジェリンは吸血鬼。ナイフで指先を傷付け、赤い液体を滴らせて口元に持つて行くと赤ん坊が母乳を吸うように血を吸われた。あまりにも一生懸命に吸うものだから一瞬だけ可愛いと思つてしまったじゃないか。

満足したのかスヤスヤと眠り始めた。

さて、今の内にカーテンを閉め、腕とか喉とか服から出てる体の汗を拭くとしてよう。

少女の体らしく柔らかい肌、細い体、ちょっと力を入れれば骨は折

れて赤い液体を撒き散らすスプリンクラーになりそうだ………見舞いに来ておいて止めを刺すとかつまらない三流小説かよ。

「エヴァンジェリンが目覚めるのが先か、俺が殺すのが先か」

日に日に殺人衝動を抑えるのが難しくなるな。何時もは奥底で潜んでいるが、いきなり表層へと現れると頭や本能を無視して殺したくなる。衝動は外から植え付けられた感情だ、とか何とかって誰かが言ってたな。

殺人衝動が表に出て来ると魔眼まで勝手に発動してしまうから俺は部屋の外に出て、外と内を分ける境界なドアに背を預けて廊下に座り込む。

世界に線や点が視える。

視えるだけならいいが、体がそれをなぞり突こうと動こうとする。生前の俺はどんな人間だったのだろうか、やはり殺人衝動を持った危険人物だったのだろうか。積み重ねた記憶がないくせに、得た知識はある。どうせなら全て忘れていればいいのに、もしくは覚えていればいいのに。

そんな事を無意味に考えて殺人衝動を抑え込む。此処でエヴァンジェリンを殺してしまえば物語がかなり変わってしまう、それだけは避けないと。

カチカチ、と時計の音がやけに響く。その音が子守唄にも聞こえてきて、思考が霧がかかっていく。

「……………寝たら殺すぞ」

気付くとドアの隙間からエヴァンジェリンが俺を睨んでいた。というか寝るのは俺の勝手だろう。

「もう起きて大丈夫なのかよ」

「風邪は治った」

そう言つてそつぽを向く額に自分の額を当て……………微熱程度には下がったか。

ゴス、と小さい拳が腹に叩き込まれる。

「痛いぞ。いきなり何をするか」

「それはこっちの台詞だ！」

「何ってただ熱がどれくらい下がったかの確認じゃないか」

「五月蠅い五月蠅い五月蠅ーい！！」

何だ、この駄々っ子モードは。

駄々っ子モードのエヴァンジェリンを軽くあしらっていると、ガチヤリ、と玄関が開く音がした。ようやく茶々丸が帰ってきたのか。

「何をしていますかマスター？」

「こいつが——」

「ただ熱を計つてみたら勝手にキレた」

「マスターは病人なんですから、大人しくしてして下さい」

猫を運ぶかのように首筋を掴み、エヴァンジェリンをベッドの上に戻して俺達は下に降りる。

出された紅茶を飲むと美味かった。

さて、少し雑談をしていくとしようか。

「俺の事をアイツに言われて調べたんだらう？」

「何故、それを？」

カマかけてみたが当たりとは。

ロジック通りに動く機械は簡単に騙されるが、目の前にいるのはガ

イノイド。人間にかなり似たAIを持ってるんだな。

「どんなのが出て来た？」

「魔法世界では魔眼持ちの魔法をあまり使わない魔法使いと言われていて、魔法と関係ない裏世界では有名な殺人鬼の正体では？と言われてる人だと」

噂の域とは、意外と正体が知られてないんだな。外国に出てからの俺は殺人衝動に体を預けて何十、いや何百人もの人間を魔眼や七夜の殺人技巧で殺してきた。殺人衝動が働く相手が殆ど悪党だったから殺せばその地域の連中らに間接的に感謝されたっけ。まあ、警察にはかなり疎まれていたけど。

あと、魔法は全く使ってない。殺人をするのに七夜の殺人技巧があれば全然必要ないんだよ。

「そんなに有名なのか」

「では本当、なのですね？」

「どれも正しくて合ってる。俺は殺人鬼だよ」

調べれば出て来るんだったら翁も俺が殺人鬼だって事を知ってるかもな。知ってて俺をこの学園に引き入れたのなら、何を考えてんだろうな。

「私が言えた義理ではありませんが、どうして先生は殺人しているのですか？」

「殺人鬼に殺人する意味なんか聞いても無意味だ。理由あつての殺人なら人殺し、理由なしの殺人なら殺人鬼って考えてるからな」

衝動で殺した、なんてのは理由なんかじゃない。それは只の殺人をした事に対する原因だからな。

「そうですか」

理解したとは言えない表情（そう見えるだけで本当は無表情）をしているが、それでいい。理解なんかされると気持ち悪くて殺したくなる。

時計の針を見ると既に針は二つとも上を向いていた。そろそろ学校に帰らないとマズイか。

「そろそろ帰るとするよ」

「分かりました。では、お気を付けて」

エヴァンジェリン宅を出て行く前に一言。

「こう言う立場じゃないが明日の、頑張れよ」

何でそんな事を言ったのかは知らないし分からない。だけどその時の茶々丸が薄く笑っていたから良いとするか。

翌日の夕方。

俺は橋に隠れてる。

あー、特に語る事ってなくねえか？俺がこの物語の主人公だったのに、出番が全くないんだぜ。

ネギ坊主は苦戦しながらも頑張り、神楽坂明日菜と仮契約してエヴァンジェリンと何とか同等の戦いをして、そして偶然にも勝てた。ネギ坊主の魔法って雷と風の精霊の力で攻撃するタイプのなんだけ

どよ、何で服が消し飛ぶだけで裂傷や火傷がないんだ？非殺傷設定なのか？

さて、そろそろ封印の復活か。

バシャン、という音とともに学園都市に光が戻りそれと同時にエヴァンジェリンが落下する。

「面倒臭い」

そうは言いつつも体を強化して落下する裸体の少女を追いつける。空気を足場にして縮地で空を駆ける。

「マスター！」

「エヴァンジェリンさん！！」

茶々丸とネギ坊主はまだ俺に気付いていないが、エヴァンジェリンだけは俺に気付いていた。その目が驚きに満ちている。大気を蹴る。

ネギ坊主や茶々丸よりも俺が早い。

大気を蹴り、距離が零になる。

「死にたいなら俺に殺されろ」

エヴァンジェリンの細い体を抱き抱え、空気を足場にする。こつこつ魔法は苦手なんだけどな、オイ。

「気味の悪い視線の正体はお前だったのか」

「よし、助けたのに礼を言わない糞餓鬼は落とすか」

下にある水面に向けて振りかぶり、

「ま、待て待て！私が悪かった！！その……………助けてくれて、ありがとう」

礼を言われたので直ぐに橋の上へ戻る。ん、何をそんなに皆して変な顔で俺を見るんだ？照れるじゃないか、いや、殺したくなるじゃないか。

「両儀先生、いつの間に……………」

「実は最初から見てたぞ」

「だったらネギを助けてやれば良かったじゃない！」

「履き違えるな神楽坂明日菜。ネギ坊主自ら果たし状を出したんだ、俺が助けてやる訳にはいかないだろ」

まあ、死にそうになったら助けようとしたけどな。その代わりに誰かが死んだらうけど。

冷たく言い放つと神楽坂は黙った。分かったけど理解できない、といった表情を貼付けて。

俺のロングコートを着たエヴァンジェリンとネギ坊主が何か話してる。いや、喧嘩してるって言った方がいいのかな。

「喧嘩するほど仲が良いってか？」

「仲直りってコトでいいの？」

「……………どうなんでしょうか？」

「兄貴……………」

マジで俺、この話で空気じゃねえか。つとにマジで誰か殺したい。殺しても問題ないって奴あ居ないもんかね。

さっさと家帰って風呂入って寝よ。

決戦……俺に出番なくね？（後書き）

最初は出番あったけどよ、でも一番の見せ場ってネギ坊主とエヴァンジェリンの戦いだろ？あーあ、どっちかの仲間になつときゃ良かったぜ。

修学旅行に行く前に誰か殺すかね。つっても誰を殺すか………名もなきモブキャラで俺に殺人衝動を起こしてくれる奴はいないか？

休日（前書き）

俺の休みが………

休日

休日のある日、俺こと両儀志貴は暇を持て余していた。

次の授業で使う教材の準備や予習なんか既に終わらせてるから、先生としての仕事がない。生活用品なんかも先日安かったので買い溜めしているし、家事も毎日しっかりしているから本当にやる事がない。

こんな時だけ自分の几帳面さが恨めしい。

バイクで近くの海まで走りに行こうか、なんて考えていると。

ピンポン、と玄関の呼び鈴が鳴った。

なんて間の悪い客なんだ。きつと頭が固いか空気が読めない奴だろ。居留守を使おうかと考えている間にも呼び鈴は鳴り続けるので、内心苛つきながらドアを開けると――

「やはり居ましたか志貴さん」

俺に会いに来た間の悪い客は桜咲刹那だった。

こいつは木乃香を守る役目に就いているから木乃香と同じくらい俺と面識があり、何故か良く懐かれている。

「バイクがありましたので居ると思いましたが、まさか居留守を使いました？」

「そんな事より中に入れ」

俺と刹那が昔からの知り合いだと知っている奴に見られてもいいが、それ以外だとあらぬ疑いや噂を流されるかもしれない。

別に俺は死ぬ前から刹那の事が好きだったからいいが、刹那の場合はそうもいかんだろう。

座布団と麦茶を出してやり、俺はベッドに腰掛ける。

「それで何の用だ？まさか茶をたかりに来た訳ではないだろ」

「では率直に、貴方がここに来た理由を教えて下さい」

うわ、嘘を行ったら斬るって気配を出すなよ。

「単純に言つと、翁に戻つて来いと言われてネギ坊主の補佐をさせられた」

「それだけですか？」

「今のが嘘ならどんなメリットがあるんだよ」

嘘を言うからには何等かのメリットがなくてはならない。

まあ、ここで嘘を吐けば刹那と戦闘。

刹那は中々強いから少し苦戦。

それが楽しくなつて殺すかもしれん。

物語が変わってしまう。

という風に話が大幅に壊れてしまうだろうから、本当の事を言つたのだ。

「……………分かりました。お嬢様を守る為ではないのですね」

「木乃香にはお前がいるだろ」

「いえ、私はまだ弱いです。こんな私では守りきれません」

「常勝無敗なんて奴はいねーよ。もし居たらそいつは悪魔か何かと契約した奴だ」

力を行使して誰かを傷付けた者はいつか、自分よりも強い者に倒される。

そして俺もいつか殺した分に見合う最低な死に方をするんだろう。

「何で長は私を選んだのでしょうか、志貴さんの方が——」

「だったら剣を捨てて女として生きる。それで昔みたいに“このちゃん”とか言って一緒にいろよ」

「それは――」

「出来ないって言うならお前は何がしたいんだ？」

あれも駄目これも駄目。だったら刹那は何がしたいと言っただ。生きている限りは何かを常に選択しなければならない。

選ばない事を選ぶ。

そんなのは選択ではなく、先送りと言うのだ。

ずっと先の学園祭でも似たような事をエヴァンジェリンにも言われるが、ここである程度答えを予め出してもらおう。

一人の少女として生きるのか、一振りの剣として生きるのか。

「……………あの、答えを見つけるまで私と一緒にお嬢様を守ってもらえませんか？」

「ふん、そうきたか。それは先送りと何も変わらないが、ちゃんと見付けるのなら良いだろう」

まあ、どうせ学園祭でその答えを聞く事になるだろうしな。それに本人の見付ける、という言葉質も取った事だし。

「で、用はもう終わりか？」

「そうですが、何処か行くんですか？」

「近くの海まで暁で走ろうかと、な」

当初はそうしようと思って出掛けようとしたんだが、お前が急に来たんだよ。と言外に入れる。

しかし俺の小さな抵抗は虚しく。

「私も一緒に行っていていいですか？」

「却下だ」

一人で虚しく海まで行こうかと思っていたのに、何が悲しくて刹那を連れて行かねばならないのだ。

確かに暁に取り付けるサイドカーはあるが、それは買い物用にしてある。

人を乗せるサイドカーはない。

「昔、乗せてくれるって言ったじゃないですか」

「覚えてないからノーカンだ」

言ったような記憶はあるが、覚えてはいない。

乗せてくれ、と何度も頼み込んでくる刹那をのりくらりと躲していれと。

ピンポン、と玄関の呼び鈴がまた鳴った。

千客万来、面倒臭いと考えてながら開けるとそこには木乃香が居るではないか。

刹那の時と同じようにすぐさま閉めようとしたら、木乃香の細い足が隙間に入ってきたので慌てて止める。

「志貴、何で閉めるん？」

笑顔だが気配が笑っていないぞ木乃香。

既に刹那が上がり込んだ以上は誰を家に上げようと変わらないが、後ろから時間を稼いで欲しいとの空気が漂ってるので。

「男には隠したい物が一つや二つあるんだ」

「志貴も大人やもんな。ほな待っとるわ」

足がどいたのを確認してからドアを施錠する。そして刹那の靴を投

げ渡した。

純粹な木乃香の事だから玄關でおとなしく待つてるだろう。だから家の裏手から逃がせば見付からないはずだ。よし、誰もいない。

「大人ですからそういうのに興味があるのでしょうか、あまりエッチなのは駄目ですよ」

「持つてたらお前が来た時に隠してるって」

まだ疑つてるのか刹那の眉が歪んでる。

あまり木乃香を待たせる訳にもいけないから、刹那を蹴り飛ばしてドアを閉めた。

「――！！」

外で声にならない叫び声を上げてる奴がいるが無視だ。

次に木乃香を招き入れて麦茶を用意する。

こら、男の部屋をそんなにジロジロ見るんじゃない。

「ちゃんと綺麗にしてるなんて意外やわ」

「京都に居た時もだいたいこんな感じだったろ」

綺麗にしているなんて言つても、生活に必要な物が最低限あるだけだからな。それ以外で持つてるのは………バイクのカタログ雑誌とかか。

あまり物がない方が落ち着くんだよ」

「なあ志貴、誰か来てたん？」

そう言つて木乃香が見せたのはさっきまで刹那が使つていたコップ。

幸いにも中身はなく、冷えていた。

「高畑先生が昨夜来たんだよ」

「ふうん、そうなんや」

少し苦しい嘘だったが何とか信じてもらえたらしい。

まあ刹那が来ていたのがバレても、授業で分からない点があったんだ、なんて言えば疑わないだろう。

良くも悪くもお嬢様だからな。

「それで何の用だよ」

「遊びに来た、じゃあかん？」

「時と場合にもよるが」

家で寝たりするしかない時は遊びに来てもいいが、今日みたいに外出掛ける時に来られてもな。

どうでもいいが男一人暮らしのベッドに座るなよ。

女子中学だからそういうのに疎いのか？

「志貴って彼女おるん？」

「がふっ！？」

いきなり脈絡のない台詞に飲んでいた麦茶が気道に入りそうになった。

うえ、ついでに胃の中身がせり上がって気持ち悪い。

「いきなり何言うとんねん！」

地が出た事に気付きながらも木乃香の頬を左右に引っ張る。

転生する前の俺は関西人じゃなかったと思うが、8年も京都で過ご

したからか地の口調は関西弁になった。
どうでもいい戯れ事だが。

「いひやいいひやい、いひやいはひき」

「うっさいわ。変な事を言った木乃香が悪いんやろが」

一分ぐらい木乃香の頬を引っ張っていると熱も大分冷えてきたので放す。

「あたた……酷いわ。それで彼女おるんか？」

「まだ聞くのかよ……」

女という生き物がそういう話に興味あるのは知っているが、実際に聞かれるとうんざりする。

言わなければダブルマンみたいにしつこいし。

いや、別に言ってもいいんだが恥ずかしいと言うか、面倒臭い？

ちなみに俺はパイナップルが入っているとなんか嫌だ。美味いんだけど、何か。

つまりそういう事。

「……んなワクワクした顔をするな。いねえよ、満足か？」

「へえ、おらんねや」

だから何だと言うのだコイツは。

殺人鬼に恋人なぞ不要、殺人鬼に必要なのは殺す相手だけだ。

ああ、でも大切な者をこの手で殺したいと思った事はあるな。どんな感覚なのだろうか、大切な者を殺すのは。

渴きを飢えを満たす液体の味。

筋繊維を骨を断つあの感覚。

それらは知らない人間を殺す時よりも甘美なのだろうか。味わって

みたい。

「志貴ってモテるのに何で誰とも付き合わんの？」

「あんまり興味がないからな」

というかモテてたなんて初めて知ったぞ。

「まさか男色の気があるんとちゃうやろな？」

「んな訳ねえだろ」

嫌な質問すぎるわ。

ちなみに男色の気ってのは、所謂ホモとかゲイとかそんな意味だ。

「兄同様の志貴がホモやったらウチはややわ」

「だから俺は特殊な性癖を持ってねえ！！」

こんなアホらしい会話をしたのは何時以来だろうか。

京都から出た俺はすぐに外国に飛び、衝動のままに殺し、生活していた。

向こうで知り合って仲良くなった人達もいたが、風の吹くままに旅をする俺にはこんな会話をする暇なんかなかったか。

そう思うとこのくだらない一日も悪くないかもな。

「あ、今笑ったやろ志貴」

「さあな」

「絶対に笑った。何か面白い事でもあったんか？」

「誰が教えるか阿呆」

「教えてくれへんねやったら、こつや！」

「うわ！？ちょ、おいこら！」

昼頃になってよう焼く木乃香は帰って行った。

……まさか二人とも俺を心配して来てくれたのか？いや、まさかな。

やれやれ、どうでも良いがこれじゃ殺人鬼の面目丸つぶれじゃねえかよ。

休日（後書き）

はあ、結局誰も殺しに行けなかったし海行こうにも昼から行ってもつまらないとか最悪。

やってらんねえ。

確認するけど俺、殺人鬼だよな？

この様子だといつ殺せるのやら。

やれやれ（前書き）

すいません、この作品は型月世界と主人公以外リンクしていないつもりだったんですが、私の我が儘からフェイト/エクストラのキャラを一体出させてもらいます。

理由は、今年出会ったキャラで嫁にしたいキャラNo.1だからです
私の我が儘を通してしまい済みません

やれやれ

朝のHRの途中、翁が呼んでるという事で学園長室に向かう途中。HRについて一言、あれが若い奴のテンションか。あのテンションには着いて行けない。

隣りを歩いてるネギ坊主が凄く嬉しそうだが、凄くウザい。楽しい理由は分かっているがハシャギすぎだろう。まだ小さいから仕方ないと言えば仕方ないんだが。ノックをして入る。

「両儀、ネギ、来ました」

「楽しみにしてくれ。それで用件なんじゃがな、修学旅行の京都行きは中止になるやもしれん」

「え…………し、修学旅行の京都行きは中止……!?」

ここで叫ぶのは知っていたから耳を塞いで正解だった、塞いでもネギ坊主の声が五月蠅い。

「うむ、京都が駄目だった場合はハワイに……………」

翁の言葉を聞いてショックを受けたネギ坊主の頭を掴んで、無理矢理話の続きを聞くようにする。

「翁、あれが難色を示したんだろ？」

「そうじゃ」

「あれって何ですか？」

「関西呪術協会という組織じゃ。実はワシ、関東魔法協会の理事もやっとなるんじゃが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてのう」

「それで今回は俺達、魔法先生がいるから修学旅行での京都入りに文句を言ってきた。そんなところか」

「え…………じゃあ僕らのせいですか」

まあ、そうなるよな。

しかし何で仲が悪いんだったか。そこは記憶にない。

「ワシとしては、もーケン力は止めて西と仲良くしたいんじゃない。その為の特使として西へ行ってもらいたい」

そう言つて翁が親書を取り出す。

「この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。ただ道中向こうからの妨害があるかもしれない。彼らも魔法使いである以上、生徒達や一般人に迷惑が及ぶようなことはせんじやろが…………ネギ君には中々大変な仕事になるじやろ…………どうじやな？」

「分かりました。任せてください学園長先生」

ふうん、子供ながらに良い顔をするじゃないか。エヴァンジェリンとの戦いがきつかけかな。

「ほ…………良い顔をするようになったの。新学期に入って何かあったかの？」

「い、いええ。別に何もありませんよ」

あからさまな同様過ぎるだろ。

ふん、どうでも良いんだが俺がここに来た必要はくないか？

「そうそう、京都と言えば孫の木乃香の生家があるんじゃないか…………二人とも魔法の事はバレとらんじやろな」

「え……たぶん」

「それ以前にあまり会話しないからな」

「志貴……まあよい。ワシはいいんじやがアレの親の方針でな、魔法の事はなるべくバレないように頼む」

「は、はい。分かりました」

「善処しよう」

どうせ修学旅行で力に目覚めるからバレてもな、と言いかけたが喉元で止める。

危ない危ない。

「うむ、では修学旅行は予定通り行おう。頼むぞ二人とも」

「はいっ！」

「了解した」

昼休み、職員室。

これで修学旅行先が原作通りに京都に決まった訳だが、俺はどうやって物語に介入するべきか。一つの班に先生が二人付き添っていると明らかに周囲に違和感を与えるだろう。

木乃香はネギ坊主と刹那に任せるとして、俺は……後手に回り続けるしかないな。先手を打って一人で乗り込んでも、あのフェイトがいる以上は勝てる見込みが少ない。

表は普通の先生として行動し、裏では刹那達と行動するべきか。

「やれやれ、居ても居なくても変わらないな」

「何が変わらないんですか？」

「しずな先生。いえ、こつちの話なのでお構いなく」
「ふふ、どうぞ」

コーヒーを受け取る。

砂糖がソーサーに乗ってないのは嫌がらせだろうか？別にブラックの方が好きだから良いけど。

それにしてもこの人の胸はでかい。この世界で一番大きいんじゃないだろうか。

「先生としては慣れましたか？」

「昔から妹分達に教えていたから平気ですが、女子のテンションには着いていきませんね」

あの黄色い声やテンションに空気だけではどうしても慣れない。俺はまだ18だが、あれが若さかと思ってしまう。

それから少し世間話をしているとタカミチがやって来た。今日もヒゲが渋いな。

「志貴、君にお客さんだよ」

「タカミチ、俺に客と言ったか？」

「まだ若いのに耳が遠くなったのかい？」

俺に客という言葉はとても似合わないんだよ。学生時代に知人と呼べるのは作ったが、友人と呼べるのは一切作らなかった。

京都の近衛家からだったら翁を通すか、電話もしくは式神で連絡をしてくる。だから俺に客が来たというのは間違いではないかと思う。

「着物が凄く似合う女性なんだけど、知り合いじゃないのか？」
「アイツなのか……………」

体中の酸素を全て吐き出したかのようなため息が出た。

「応接室にいるんだろ？」

「ああ、そうだよ……君の使い魔かい？」

タカミチの横を通り過ぎようとしたら、小声ではつきりと聞いてきた。それに対し俺は後ろ手に手を振って答える。

俺に会いに来たというのが本当にアイツなら、応接室には行きたくないな。とはいえ行かずに無視していると授業中に乱入してくるかもしれない。

回れ右したくなる足を止め、応接室の戸を叩き中に入る。

「お久しぶりですご主人様^{マスター}」

応接室の中に居たのはタカミチが言った通り着物が似合う女性だった。

だが見るだけで彼女が人間でない事が分かる。頭には大きな狐耳、腰からは九つの尻尾、それだけで人間でないのが分かる。

「タマモ、ここに来るまでにその耳とかは隠していただろうな」

「はい、それはもちろん。このタマモ、ご主人様の迷惑になるような事は一切しておりません」

だったら学園に押しかけずにせめて家で待てよ、と言いたくなったが止めておく。

タマモのこういう所は昔から全く変わってないから、言うだけ無駄だろう。

出会ったのは六年前、俺が12歳ぐらいの頃だ。

今日も日課であるイメージトレーニングを開始する。

七夜を投影し、頭の中に描いた素子の影と斬り合う。向こうの武器は野太刀に分類される長刀なのだが、短刀を持つ俺よりも手数が多い。

七夜で流しつつ懐に入るが、刃が届く前に距離を離される。

踏み込みながら流すが七夜が弾かれたので、今度は兼定を投影して斬り結ぶ。

身体能力がチートだが経験があまりない為に、このトレーニングしているんだがやはり経験の差は簡単に埋まらない。

何合斬り結んだか分からなくなったところで兼定が弾かれ、投影するよりも早く向こうの白刃が俺の首筋に当てられる。

「くそつ、また負けた」

今日のイメージトレーニングで負けがついに5桁を超えてしまった。直死の魔眼を使えば勝率が上がるのだが、それでは強くなれない気がするので使っていない。

汗を流そうと近くの川へと下り、体を冷やしていると。

「やつほー少年。元気かな？」

「帰れ」

俺をこの世界に転生させた女神が川の中から出て来た。

お前はどこぞの童話に出て来る湖の女神か何かか、と突っ込みたいが突っ込んだら負けな気がする。

「今日は君の為に使い魔になってくれる子連れて来ました」

「そうか、帰れ駄女神。いや駄目神」

「私はこの後、少年がデレる事を信じてる」

魔眼解放。右腕に一本、左腕から右骨盤にかけて一本、胸に一個か。投影をするまでもない。

行くぞ、生きているのなら神様だつて――

「ストラグルバインド」

「ってそれは“リリカルなのは”の魔法だろ！」

この駄目神は何でもアリなのかよ。

両腕両足をバインドで縛られた俺を駄目神が見下ろしてくる。くそ、その勝ち誇った顔を殺してやりたい。

投影した剣でバインドが斬れないか試してみたが、縛った相手の魔法を封じる効果があるらしく、投影が全く発動しない。

「それで、この少年はどうか？ちょっと捻くれてるけど、面倒見は良いよ」

「中々のイケメンさんですね」

第三者の声に反応して顔を上げると、そこには狐の獣人が立っていた。感じる力と線が見えない事から神に属する存在なんだろうが、そんな存在を使い魔に下していいのだろうか。

見た目は胸元をあらわにしたミニス力並の裾の短さにアレンジした青い和服と、桃色の髪を結った大きなリボン、狐の耳と九つの尾が特徴だ。

尾が九つある狐という事に冷や汗が出て来る。

「私の真名は“玉藻の前”なんで、気安くお前とか、タマモと呼んでくださいな。キャッ、私ったら言っちゃったー」

「待て、俺はお前のマスターに『なる』って駄目神!!」

俺の声に被せて俺の発言内容を変えてんじゃねえ。って待て何だその色々と凶々しい契約書はというか、何俺の手に朱肉を付けて契約書に近付けてんだ。まさかそれに印したら使い魔の契約が完成するとかないよな!?

「ふふふ非力だね少年。さあ契約契約」

そうして俺は無理矢理タマモのご主人様(と書いてマスターと読む)にされた。玉藻の前、つまり九尾の狐を式神にしたという事を翁達に伝えると、何故か感心されたり白い目を向けられたんだよね。ちなみにタマモは天照の一人格で本物の神様らしい。詳しく聞いてないから良く知らないが。

「それで何しに來たんだよ。あと表ではマスターと呼ぶな」

「じゃあ志貴様……………何だか付き合ってるみたいですね、私達」

「そういうのはいいから理由を言え」

「私は志貴様の従者なのに置いていかれたので、最初は天罰を与えようかなって思ったんですけど、日本に戻ってきたのを聞いたのでいきなり仕事場に來て驚かそうと思ったんです。驚きました?」

「今からその答をシてやるから目を閉じろ」

タマモが目をちゃんと閉じたのを確認し、その頭を両手で優しく挟む。心なしか顔が少し上を向いた気がする。

本当に俺^{マスター}ラブな奴だよな。

「いくぞタマモ」

「……はい」

頭を挟んでいた両手に力を込め、万力のように頭を圧迫する。両手を拳にしてグリグリしないだけ俺も甘い。

「痛い痛いです志貴様！」

「痛くしてるから痛いに決まってるだろ。あと仕事場にいきなり来たら驚く以前に困るだろうが！」

「あつゝごめんなさい〜」

しばらくお仕置きしていると翁がやって来た。大方タカミチとかから俺に客、と聞いたのだろう。

昔から俺が友達らしい存在を作らない事を心配していたからな。

「なんじゃ、来たのはタマモじゃったか」

「まだ元気だったんですね、おジイさん」

「相変わらず口が悪い狐じゃのう」

それには同意したい。

マスターである俺には毒を吐かないが、それ以外には毒を吐きまくるから後のフォローが大変なんだ。

「志貴、修学旅行では木乃香の事を気にかけてくれんかの」

木乃香が向こうに捕まるのを知っている以上、あまり見てやる事は出来ないんだけどな。

「出来る範囲でならな」

俺はネギ坊主と同じ西洋魔術側の存在だから、向こうは敵だと思って攻撃してくるだろう。しかも俺を潰す事で楽にこっちの戦力の減退させられるから、俺を集中して叩いてくると思ってる。

仮にも俺は翁によって近衛家に迎え入れられ、長にも養子にならないかと言われた事があるが、敵はそんな事を考えずに武器を取るはずだ。長の子供である木乃香を人質にするぐらいだからな。

足止め役をいかに速く殺してネギ坊主達と合流するのが鍵だろう。

「志貴にはいつも迷惑かけてしまうのう」

「俺は木乃香とかの兄貴分だから問題はねえよ」

「うむ、そうか。ところで志貴には彼女おらんのかの？」

「はい、それは――」

私、とタマモが言い切る前にその口を塞ぐ。

俺一筋なところは好ましく思うが、そういうところは修正しろ。黙っていれば十分に可愛いんだが暴走特急なのはいただけない。

「ワシはひ孫の顔が見たいんじゃないがな」

「俺はあんたの孫じゃないし、気が早過ぎんだろ」

「相手がいないんじゃないら木乃香はどうじゃ？」

「木乃香の意思はスルーかよ」

「あんなガキんちよより私の方が良い女です！」

タマモ、お前はちょっと黙っていいようか。話が全然噛み合っていないから。

俺と木乃香ねえ……ふん、俺にはアイツが眩しすぎる。

仕事を終えて自宅。

本当は京都にタマモを送り返そうと思ったが、どうせもう少ししたら京都に行くので止める。

そんなタマモは今、台所で料理を作っていた。なんでも俺に置いて行かれた間に腕を上げたから食べて欲しいとの事。

「出来ましたよご主人様」

そう言って持つて来たのは白米にワカメの味噌汁、焼き鮭。タマモが狐だからという事ですっかりお稲荷さんでも作ると思っていた。

「ふむ、まあまあか」

「やりました。あのご主人様に“まあまあ”と言わせました！これで良妻狐にまた一步近付いた事間違いないです」

本当にタマモは表情がコロコロ変わって面白い。

俺もタマモみたいに馬鹿になれば、あのクラスのテンションに着いていけるのかね。嫌だけど。

「どうしましたご主人様？私をジー、と見て……あ、私を食べたくなっただんですか？もう、ご主人様のらんせエロチカ」

くねくねと動いて突っ込み待ちなタマモをスルー。下手に突っ込めば言いくるめられる。

「大丈夫ですご主人様、私は放置キャンツ」

「黙ってメシを食え」

あまりにも暴走していたため、近くにあったリモコンをぶつけてやった。

普段がこれだけ阿呆なくせに、こと戦闘になると真剣で強いから面倒臭い。流石は狐。

やれやれ（後書き）

ふう、やれやれ。

なんか今回はあまり話が進まなかったな。それに俺の使い魔、タマモがやって来たりで疲れた。いや憑かれたと表記するべきか？

まあいい、あと少ししたら修学旅行、それでようやく堂々と殺せる。
早く修学旅行当日にならないものかね

おいタマモ、俺のベッドに入ってくるな！

仲良くなるには？（前書き）

自己という存在を造るが故に、

他人とは永遠に分かり合う事はない。

だから誰もが孤独に生き、孤独に死ぬ。

だが、と異論を述べるなら、

正確に正しい言の葉を紡いでみせろ。

それでも運命（死）は孤独を持つてくるが。

なんて、戯れ事を吐きなくなつた両儀志貴であつた。

戯れ事だから受け流してくれ。

あと今回は本編と関わりないから飛ばしても問題ないぜ

仲良くなるには？

朝倉 side

あまりにも普通に先生をしてたから忘れてたけど、両儀先生の情報がまったくない。

私に情報を与えないなんて先生やるね。

休みの日に見たっていう情報すらないから、スクープ自体撮れそうにない。

こうなったら直接聞くのが1番だけど、まず何処にいるかすら分からないんだよね。

まるでこっちの動きを見切ってるみたい。
やれやれ、どうしたものか。

お、あれは本屋。

廊下の向こうから前髪を垂らした少女がやってきた。

「朝倉さん、次の授業は自習だそうです」

「ありがとね本屋。監視の先生は誰か分かる？」

「たしか両儀先生だったかとー」

これは天の采配？

私が欲しかった状況がこんなにも簡単に手に入るなんて。
とりあえず、取材の準備をしないとね。

志貴 side

ゾワツ、と背筋に悪寒が走る。

風邪を引いた気配はないから嫌な予感の方が。面倒臭い。

次は瀬流彦先生が休みだから俺が3-Aの監視をするんだったか。

あのクラスで起きる嫌な出来事、ね。

新田先生が代わりに入ればアイツらも静かに自習すると思うんだがな。

「相変わらず無駄な事はしない主義ですね、ご主人様」
マスター

子狐状態のタマモが聞いてくる。

確かにその状態なら俺に着いて学校に来れるが、俺のキャラが可笑しくならないか？

皮肉屋で孤独を好むような奴が子狐を連れてるってのは。

「大丈夫ですよ、むしろそっちの方が好感度上がります。あ、でも

ご主人様が他の女に注目されてほしくないですね」

「どうしろって言っただお前は」

「ご主人様を見てていいのは私だけです」

山に籠って仙人みたいに暮らせと言うのか、こいつは。

「授業中は喋らずにおとなしくしているよ。バレたら一大事なんだからな」

「分かっています」

それにしても子狐状態のタマモの毛はサラサラだな。撫でていて気持ち良い。

このままずっと撫でていたいが。

「も、もつと撫でてください」

「時間切れだ。そろそろ教室に行かないとな」

タマモを肩に乗せ、教室に向かう。

歩いている途中色んな生徒の視線を浴びたが、それはタマモを連れてるからだよな。

一目に晒されるのは好きじゃないんだが。

通り過ぎて行った生徒達が私の話をしている気がするが、気のせいだろう。

無理矢理そう言い聞かせる。

チャイムと同時に3 - Aに入る。

「おら、授業が始まったんだからさっさと席に着け。そのまま自習を開始しろ」

自習といっても自由時間に近く、真面目に勉強している生徒は少ない。

まあ、静かにしているだけマシだろう。

タマモを床に下ろし、図書館から借りてきた聖書を読む。

別に聖書を借りた意味はない。ただ暇で手に触れたから借りてきた。難しいイメージがある聖書だが中は物語なので、意外とスラスラ読めたりする。

欠点は分厚過ぎる事か。

一冊だけでも結構重かったりする。

誰かが近付いた気配に気付き顔を上げると、朝倉和美が目の前に立っていた。

「へえ、先生は聖書を読むんだ」

「勉強をしているとは言わないが、せめて席に座っている」

「そうはいかないだね。先生、ちょっとインタビューされてくない？」

「断る」

何でそんな事をしなければならぬのだ。面倒臭いに尽きる。

「そこをなんとか」

「俺にメリットがないから却下」

「先生が欲しい情報を提供するから、ね？」

俺が欲しい情報ね……………バイクのぐらいしか欲しい情報はないな。

朝倉が持つてると思わないし。

かといってこのままだと引き下がらないだろう。

はあ、仕方ない。

少しだけ付き合ってやり、さっさと解放してもらおうとしよう。

「黙秘・問題の却下を認めるならされてもいい」

「う……………じゃあ、それで」

この条件ならばたいていの質問は躲せるはずだ。

向こうも少しだけとはいえ俺が答えるのだから、この提案を呑むしかないと考えたみたいだな。

駆け引きがなかなか上手い事で。

「まず先生は何処に住んでるの？」

「近くに家を借りて住んでる」

「一人暮らし？」

「足元にいるタマモと住んでるが」

俺達の話に興味が出て来たのか、クラスの大半が近付いてきている。その中に刹那、なんでお前が入ってるんだ。

「恋人はいるの？いないとしたら作る予定はある？」

「いないし、面倒臭いから作る気もない」

「なんで作らないの？もったいない」

「逆に何故作らねばならない？」

恋人とかそんなモノは邪魔になるだけだ。

「じゃ、じゃあ好きな言葉と座右の銘は？」

「座右の銘は“楽しんで稼ぐ”だな」

「駄目人間！」

「自分は楽しんで金を稼ぐ、いいよな。そんな職業に就きたいものだ」
「先生は全国で働いてる皆さんに謝るべきだと思う」

クラス全員一同に頷かれた。

そんなに酷い事を言ったのだろうか。

「汗を流して金を稼ぐ人の気持ちが分からない」

「工事現場で働いてる方達に謝れ！」

「なんてピンポイント」

社長を考えてみる。あれは全く動かないで金を手元を集める、なんて効率の良い仕事だろうか。出来るなら社長になりたい。

「いや、全員が全員そうだとは思わないけど」

「たいていの社長は会社の金でゴルフとかやってるはずだが？」

「それは偏見のような気が」

ところが、暗い部分を突くとね。

「そんな会社だから部下が金を横領とかするんだろっな」

「一気に話が飛躍してるよ先生」

「だからイジメはなくならないんだ！」

「話の繋がりが可笑しいってば！」

「お前達、やってないだろうな？」

「情報通の私に入ってこないからないはずだよ」

「知らないのは朝倉和美だけだった」

「え、私ハブられてんの！？」

「全学園生徒からな」

「そんな状況に気付かないで記者やってる私っていったい……………」

「実は夢オチだった」

「誰の！？……………あれ、結局何していたんだっけ」

よし、何か知らないけど朝倉がインタビューを忘れてくれたみたいだ。

意外に頭弱いな。

コントみたいにすれば朝倉からは逃げられる、と。

頭の片隅にメモを残しておく。いつか役に立つ時がくるだろう……………

……………いつか、ではなく、かなりの間違いだな。

「志貴のインタビューをしとったやん」

「近衛、先生と呼べ」

「え、二人は知り合いで将来を約束した仲なの？」

「何故そうなる。昔に近衛の家に世話になっていただけだ」

「その時の話を詳しく聞かせて」

「却下だ」

朝倉がふて腐れるが、最初に決めた取り決め通り深く追求はしてこなかった。

俺に近い人間から聞き出そうとするかもしれんが、俺の過去を知ってる奴はおいそれと話しはしないだろう。

黙秘しようかとも思ったが、それで噂を流し大衆常識となっては敵わないからな。

それからの質問はたいしたモノではなかったので、適当に答えておいた。

俺の好きな食べ物とかを調べて報道し、それを得た誰かは何の役に立たせるのか知りたい気分ではある。

どうでもいいが何故に足のサイズやらスリーサイズを尋ねたのだから。

お前達からすれば俺なぞ少し会話をしただけの、ただの通りすがりだろうに、何故知りたいのか訳が分からない。

自分の人生に深く関わるなら知りたいと思うが、あまり関わらないモノを知って何になるというのか。

必要と不必要に分け、必要はまったく吸収しないようにしている俺としては全く理解できない行為である。

他者を深く知る必要はないと思う。結局は自分ではなく他人だからだ。

そもそも自分すら人は理解しきれていないのに、何故他人を知ろう

とするのか。

他人を知って己を知る？

もしもそうなら愚かすぎる行為に他ならない。

先も述べたように我々は他人なのだから、他人を知って己を知ろうなど無意味だ。

所詮は戯れ事でしかないんだがな。

無作為に思索の海へ潜っていると、終礼のチャイムが鳴り響いた。
挨拶を交わし、外へ出る。

女だらけの空間から逃げ出せたからか、朝倉の質問から逃げ出せたからか、外の空気は美味かった。

「ご主人様、あの小娘呪い殺してやりましょうか？」

「……………別にしないでいい」

「何故ですか？私にすればご主人様を困らせるのは全部敵です」

「辟易するがアレは俺の殺人と一緒だからだ」

己の欲望という名をした杯を満たす、麗しき液体。

杯が何であれ、それを満たす行為は誰にも邪魔されたくはないだろう。

だからこれといって何もしない。

「ご主人様がそう言うんでしたらしませんが、不快に感じたならば
言っして下さいませ。このタマモ、全力で排除します」

「まあ、その時は頼りにするか」

「ワ、ワンモアプリーズ。い、今の言葉もう一回お願いします……
……………っ！」

タマモは相変わらず面倒臭かった。

朝倉 side

はあ、いくら取材する為とはいえ両儀先生のあの条件はキツかったな。

とはいえ結局取材させてくれるなんて、先生もなんだかんだでお人よしののかも。

今回手に入った情報はお世辞にも面白いとは言えず、このまま流しても先生の紹介といった小さなニュースになるだけだ。

先生が何故近衛家の世話になったのか、その内容が掴めればよかったんだけど。

推測で記事を書くのは私の主義に反するからな……………。

他の先生陣に両儀先生の事を聞いても、学園長が連れてきた新任の先生、ってしか情報はなかった。

これは何かあると考えていいだろう。

まだ18と成人していない少年を先生に……………ってそれを言ったらネギ君の方がもっとかあるか。

ん、ネギ君が正式に先生になってから時間が少し過ぎたとはいえ、そこに両儀先生が副担で入ってくるなんてやっぱり二人には何かあるね。

ま、それは追いついていくとして。

この両儀先生についての情報をまとめて記事にしますか。

先生は壁を造って接してる節があるから、それを何とかする為にも

記事を書いて色んな生徒に知ってもらおうしよう。
あゝあ、本当はもっと先生の裏を知って記事にしたかったんだけど
な。

— s i d e —

後日、朝倉の手に因って造られた校内新聞で志貴が良くも悪くも知られ、声をかけられる頻度が上がったそうだ。

やはり、取材を受けるべきではなかった。

後に志貴はそうばやく。

仲良くなるには？（後書き）

はあ、なんて面倒臭い。

授業で分からない点を聞いてくるならいいが、それ以外を聞かれるのは、な。

何故に俺なんかと仲良くしたいんだか。

まったくもって不可解だ。

そうそう、たぶん次回から修学旅行編に入るんじゃないか？

作者は気まぐれだからどうなるかは分からないが。

プロフィール設定

両儀志貴

178 cm 54 kg 18歳

見た目：マジ恋の風間翔一からバンダナを取ったような外見で、目付きが鋭くなっている

性格：冷たいが面倒見がよい。

つつい殺したい、と考えてしまうあたりある意味まっとうな殺人鬼。

地が出ると関西弁になってしまう。

好き：殺人。辛い料理

嫌い：正義を歌う奴。前を向かない奴

魔力：普通の人より少し上なぐらい

身体能力：人間の限界を遥かに超えているチート。縮地とか可能

魔眼：両儀式の魔眼、遠野志貴よりは上の設定。魔眼殺しは必要ない

得意属性：闇、火

得意魔術：刀剣限定の投影魔術

『も使えるが、使うには兼定とタメが必要

空気を固めて足場にする事も出来る

戦闘スタイル

七夜の体術を使って殺し、それで殺せない敵は魔眼を使ったり魔術を使う。

気と魔力を運用出来るが咸卦法はまだ出来ない。

ステータス（FATE風）

筋力 S

耐久 A

敏捷 S

魔力 C

幸運 B

『状態だと全能力がEXになる』

> i 1 4 1 0 4 — 1 9 6 2 <

タマモ

注意：フェイト/エクストラのネタバレを含みます

あとアニヲタ Wiki から引用していますので、少し違つかもしれません

声：斎藤千和

身長：不明 体重：不明

3サイズ：不明

血液型：不明 誕生日：不明

イメージカラー：紺（コン）

特技：狩り、占い、呪術

趣味：不明

好きなもの：温泉旅行、愛妻料理、贈品

苦手なもの：犬

マスター：両儀志貴

宝具

すいてんにっこうあまてらすやのしずいし

『水天日光天照八野鎮石』

効果

『魔力を消費しないで術が使える見た目ただの鏡』

真名は「玉藻の前」（玉藻御前）。

平安時代末期に現れた架空の絶世の美女で、その正体は日本三大妖怪の一匹『金毛白面九尾の狐』。大変な博識と美貌を持ち、国一番の賢女とも天下一の美女とも謳われた。そして当時の権力者「鳥羽

上皇」に取り入り、上皇や京の都に謎の奇病を流行らせるが正体がばれ那須野に行方を眩ます。

それでも悪事を働き、上皇は八万の討伐軍を送り込むも、自身の操る強力な妖術で多くの兵を屠り撤退に追い込んだ。

しかし、再度の交戦で遂に阿部泰成に討ち取られ死亡した。

九尾の狐にとどめを刺した陰陽師・阿部泰成は安倍晴明本人とも、その孫とも言われている。

だが、その魂は『殺生石』となり呪いと瘴気を撒き散らし人々の命を奪い続けたという。

いざ京都へ（前書き）

さあ京都編が始まるぜ。

いざ京都へ

朝、色んな事がありそれでも京都へ無事辿り着いた、そう言っているのだろうか。

蛙を召喚し混乱に乗じて親書の奪取しようとしたり。
恋占いの石の間に落とし穴造ったり。
滝の中に酒を混ぜたり。

そんなに敵はこっちが来るのが嫌いか。

「^{マスター}ご主人様敵も中々悪ですね。白昼堂々と襲ってくるなんて」
「それだけ切羽詰まってるのかね」
「もしくは嫌いなのか」

それで木乃香を犠牲にしてスクナを召喚するんだから質が悪い事この上ない。だから俺がしつかり後で殺すんだがな。

それにしても何故ネギ坊主が親書を持っている事を向こうは知っている？スパイなんか居ないはずだがそれで知つてるとなると、盗聴でもされていたのか？だとしたら大分前から俺達は奴らに見られている事になる。

これは動きにくくなるな。

「ご主人様、笑ってますよ」
「ん、そうか」

慌てて口元を手で隠す。

こんな大変な状況で笑っているのは俺が敵だとネギ坊主達に勘違いさ

れてしまう。

さて刹那は何であんな風に疑われるような行動をするのかね。あれでは自分が敵ですよ、なんて言ってるようなものだが。それを確認する為にも刹那と話をするべきだな。

タマモを肩に乗せて刹那がいる部屋に行くとするか。

「私は思うんですけど私が敵を見付けてご主人様が殺しに行く、なんて作戦は駄目なんですか？」

「それで殺しきれんならするんだが」

そうだったら一気に攻め落としている。

しないのは向こうにフェイトがいるからなんだよな、アレらと戦うとすれば俺とタマモだけじゃキツイかもしれん。いや、タマモが全力を出せば簡単に消す事は出来るんだが、それは何となくつまらない。

極力ストーリーに沿って誰かを殺していくのかが目的だから、フェイトと戦うのは俺じゃなくてネギ坊主だ。もし俺が運良く殺せたら後の話がどうなる事やら。

刹那達が休んでる部屋に着き、ノックをすると綾瀬夕映が出て来た。

「どうしました両儀先生」

「せ……………じゃなくて桜咲は居るか？」

「ちょっと待ってて下さい。呼んで来ます」

それだけ言って部屋に戻った。

にしても綾瀬の表情はこうして目の当たりにしても見分けにくい。

変化はあるんだが微かにだからムスツとしているのか普通なのか全く分からん。

しばらくして刹那が出て来た。

「志貴先生、どうかしましたか？」

「ちよつと面を貸せ」

「は、はい」

とりあえずあまり人気のない場所に行くでしょう。あまり他人に聞かれたくないし。かといってあまり離れないようにしないと、後での混浴イベントが潰れかねん。

適当に歩いているとホテルの中庭に出た。誰も居ないから此处にするでしょう。

「なあ刹那」

刹那に近付いてその両肩に手を置く。

「駄目です志貴さん、こんな所で……」

何を勘違いしているんだこいつ。心なしか少し頬が色付いているし。盛大なため息を吐き。

「お前、けつこう馬鹿だろ」

「ですよ、深謀遠慮な性格してるかと思っただけですけど」

「離れた所から見守ってるつもりなんだろうが、ネギ坊主に敵だと思われてるぞ」

今頃たぶん神楽坂と会話しているだろう。それであのオコジョがはやとちりして敵だと断定しているはずだ。

「そんな………でしたら志貴さんから私が敵ではない、と」
「手前が蒔いた種を他人に任せるな。まあ、それとなく言っというやるが、自分で誤解を解けよ」

俺もまだまだ甘いな。

やっぱり京都の近衛家で過ごしたからか刹那達に少ばかり情がある。殺人鬼が情など持つていてはらしくない。

「あと、奴らが何かするなら今日だ」

「お嬢様は私の命に代えても守ります」

気合いを入れ直す刹那を置いて俺は本館に戻った。

これで刹那の誘導は済ませたから次はネギ坊主の誘導か。混浴イベントを発生させるだけでいいだろう。

確か教員の入浴時間はもう少ししたら終わるからネギ坊主を引き連れて先に入らないとな。

タマモは、部屋に置いて風呂に入った方がいいかもしれん。子供がいるのにあいつが入って来たら大変な事になりそうだ。

「あら両儀先生。今からお風呂ですか」

「しずな先生、丁度良いところに。タマモを預かっていてもらえますか」

「分かりました、お風呂に入っては大変ですしね。あ、ネギ先生にも入るように言ってください」

「了解しました」

巨乳先生ことしずな先生にタマモを預けた瞬間、泣きそうな声でタマモが鳴いたがお前を連れて行きたくないんだよ。混浴イベントが始まったらたぶん色々修羅場になる。

さて、ネギ坊主は原作通りならロビー付近で神楽坂達と………といった。

「ネギ坊主、そろそろ俺達教員の時間がなくなるから風呂に行くぞ」
「ひゃっ」

「あ、両儀先生。じゃあ、続きは夜の自由時間に聞くとよ」
「OKッス姐さん」

神楽坂も行つた事だし俺達も風呂に行くでしょう。体を洗っているところに出くわして変態扱いされたら敵わない。
部屋に戻ろうとするネギ坊主の頭を掴む。

「時間がないからスマンが勝手に下着とかを持って来た。という事で行くぞ」

「ありがとうございます志貴さん」
「志貴のアニキが利くッス」

ネギ坊主はカモを風呂にまで連れて行く気らしいが、本来こういう温泉とかに動物を入れたらいけないんだが………まあ、原作で難無く入っていたから深く考える必要はないか。

風呂場で服を脱いでいるとネギ坊主が俺の体中に付いた傷に驚いていた。殆どが刹那と一緒に特訓して出来た傷で、外国に出てからは一つも傷付いてない。

「この傷が気になるか？」
「は、はい。どうしてそんなに傷だらけなんですか？」
「俺が弱かったから、としか言いようがないんだが。ちなみに全部ガキの頃に付いた傷だ」

「子供の頃にいったい何があっただんですか」
「ただ剣の修行にのめり込んだだけだ」

足りない経験の溝をなるべく早く埋める為にひたすら素子が出してくる内容を熟し、その度に死にかけ強くなったのが今の俺だ。とはいえまだまだ強い奴は世界にいる。
駄弁ってないでさっさと風呂入るか。

うる覚えだが温泉に入る時は体を洗わなくて良かったと思うが、後に入る奴の事を考えて体は洗わないとな。
という訳で。

「こら、ネギ坊主。しっかりと洗え」

あまり洗わずに風呂に入ろうとするネギ坊主を捕まえ、頭皮を傷めない程度にしっかりと頭を洗う。同性同士とはいえ流石に体までは洗わないがな。

何らかの手違いで刹那じゃなく腐女子が入って来たら大変だ。
体までしっかりと洗ったのを確認してから露天風呂に入る許可を出す。

「いや」志貴のアニキには世話になってばかりで悪いツスね」

「そう思うなら注意をしっかりとしろ。あと、お前は体を洗ったよな？」

「あ、洗ったツスよ」

「ノミとかを見付けたら毛を全部抜くぞ」
「体洗ってきます」

「つたく、カモの奴があんなだからネギ坊主も烏の行水になるんじゃないのか。」

気配はしないから刹那はまだ来ないだろう。

「ふう」

木乃香の事やネギ坊主の補佐を一応頑張っていたから体中の筋肉が硬直していたが、ここの露天風呂に入って神経までもがほぐれていく気がする。

一人で来ていたら満月を肴に月見酒といきたいところだ。

「風が流れて気持ち良いね」

「ネギ坊主、ちょっと話が——」

刹那の事を敵じゃない、と告げようとしたら刹那がタイミング良く入ってきやがった。お前、狙ってないよな？

見とれる二人（一人と一匹）を引きずって岩の影に隠れようとする。

「——魔法使いのネギ先生なら何とかしてもらえと思ったんだが」

最初の方は上手く聞こえなかった。

しかしこれで混浴イベントは完結する。

杖に力が思わず力が入ったネギ坊主に反応した刹那はまず照明を壊し、俺達が隠れている岩を愛刀・夕風で斬り裂いた。

神鳴流奥義・斬岩剣。

ネギ坊主も負けてなく風花武装解除で夕風を弾くが、魔法使いが敵に間合いを許した以上はネギ坊主の負けだ。首筋と急所（股間）を狙う刹那の腕を抑えてバスタオルをかける。

「はいそこまで。刹那はそれを体に巻け」
「——え、きゃあっ!!」

俺がいる事にようやく気付いた刹那が大事な場所を隠しながら温泉に潜る。

さてバスタオルを巻くまで背中を向け…………カモがエロ親父丸だしで刹那を見ていたので踏む。もちろん温泉の中へだ。

「もう大丈夫です」

「あの志貴さん、どういう事ですか？」

「桜咲刹那はネギ坊主の敵でなく、一応味方なんだよ」

「……………へ？あ、あのそれってどういう……………」

「私は木乃香お嬢様の……………」

ひゃあああああゝっ!!

「こ、この悲鳴は……………」

「木乃香お嬢様!？」

さてここから楽しくなるぞ。まずは敵の大将とのファーストコンタクト、次に戦闘。

俺の相手は誰が務める？

いざ京都へ（後書き）

黎「刹那の裸を見た志貴さん、感想をどうぞ」

志「ガキの頃は三人で入ったりしてたからいまさらどうって言われ
てもな」

黎「全国のロリコンを敵に回しそうですね」

志「嗜好なぞそいつの勝手だからとやかく言わないが、犯罪にだけ
は走るなよ」

黎「殺人鬼のお前が言う台詞じゃないよな」

志「まあな」

黎「さて次回はようやく戦闘、と言いたいけど10万アクセス突破
な話を書こうかな」

志「戦闘シーンはあるのか？」

黎「書く書かない以前にネタがないから何とも言えないけど」

志「だったら本編進めろ」

武器を振るうは誰が為（前書き）

今回はまったく話が進まない上に俺じゃなく刹那視点が多い話だ。

武器を振るうは誰が為

志貴 side

ひゃああ~~~~っ!!

「こ、この悲鳴は木乃香さん!？」

「木乃香お嬢様!？」

ネギ坊主の誤解を解こうとしたら女性用脱衣所の方から木乃香の叫び声が響く。おそらく敵の式神が二人の下着を奪おうとしている事だろう。

すぐに攻撃出来るようナイフを投影。

「まさか奴ら木乃香お嬢様に手を出す気が……………!？」

「行くぞ刹那」

「はい!」

女性用脱衣所に入るなぞ出来るならしたくはないが、やらなきゃ怪しまれるし。後でタマモに話がいけないよう箝口令を敷いておかないと。

戸に手をかけ中の様子を確かめると、

「いやあ~~~~ん」

「ちよっ…………ネギ!？なんかおサルが下着をーっ!？」

式神らしき小さな猿達が神楽坂と木乃香の下着を奪おうとしていた。どうでもいいが何故に下着を奪おうとする。

やるなら先に気絶させて運んだ方が楽だと思うんだが。

そしてついに木乃香の下着が全て奪われ、それに激昂した刹那を止

めようと抱き着いたネギ坊主のせいで刹那は転倒し恥ずかしい場所を見られ（俺は背を向けた）、その隙に木乃香が連れさられる。

「お嬢様！！」

あつちは刹那に任せるとしよう。

俺は近くにあったバスタオルを神楽坂に渡し、刹那達の方も持って追いかけると、刹那が気を纏わせた夕凧で周囲の猿を全て斬り裂いていた。

神鳴流奥義・百裂桜華斬。

気配のする方へナイフを投げたが手応えはなく、どうやら逃げられたみたいだ。

「せ、せつちゃん。なんかよー分からんけど助けてくれたん？……あ……ありがとう」

「あ……いや……」

木乃香に礼を言われて照れた刹那は木乃香を湯舟に落とし、逃げ出した。そんな反応をするから巷では夫婦だのなんだの言われると思うんだが。

「あ……」

「ちよつ、何よー今は……」

「とりあえず木乃香は体を隠せ」

バスタオルを渡して俺は男性用脱衣所へ向かう。どうでもいいが俺はイベントに参加する必要なかったよな。
脱衣所の戸に手をかけ、

「あの志貴さん、刹那さんはいつたい……………」
「知りたいなら木乃香に聞け」

急いで刹那と合流して対策を練っておかないといけないので、木乃香に任せる事にした。

ガキに興味はないが誰かにこんな状況を見られたら、根も葉も無い噂を立てられてマズイからな。

刹那 side

はあ…………危うくお嬢様を連れ去られてしまうところだった。ネギ先生はともかく志貴さんがもうちょっと頑張ってくれたらあんな事にはならなかったと思う。

違う。これは責任転嫁だ。

私がちゃんとしていればあんな事にはならなかったはずだ。ネギ先生に邪魔されたとはいえ直ぐに振りほどけなかった私が悪い。嫌われても守る、そう決めたんじゃないのか。

今は出来る事をしよう。

向こうは式神を使ってお嬢様を奪いにかかった事からあまり数はいないのかもしれない。だとしたら式神返しの呪符を出入口付近とかに貼って結界を造っておけばなんとかなるだろう。

それにしても式志貴さんの体大っきくなってたな。昔よりも肩幅があるし、全体的に筋肉付いてたし。

「あかん、露天風呂での事を考えたらあかん」

まさかとは思うけど私の裸見られてへんやろな。もし見られとったら責任を取ってもらわな。

そ、それで私が卒業したらけ結婚なんかしたりして……………

「刹那、手伝う事はあるか？おい刹那？」

「駄目ですね。なんだか自分の世界に入っちゃってるばいですよ」

子供は三人ぐらいで庭付きの家に住んで、あ、大きな犬が欲しいな。その犬に小さな子供を乗せて……………

「おゝい刹那？」

「全然聞いてないですこの小娘。バチツとやっちゃいましょうか」
「頼む」

いきなり体に走った電撃で我に返ると目の前に志貴さんとタマモさんがいた。

も、もしかして今までの私を見ていた？恥ずかしい。

「それは式神対策か？」

「あ、はい。これで結界を造れば式神は入ってこれません」

「なら俺も手伝うから幾らかよこせ」

ぶっきらぼうに言う志貴さんに札を渡す。

なんだかんだでこの人もお嬢様を大切にしてくるみたいで安心出来る。ただ本気を何故か出していないような気がしてならない。まるで自分が参加しなくとも大丈夫だと確信しているかのように。

「後はこのフロント付近だけで大丈夫ですので、お願いします」

「ほら行きましょうご主人様、あっちなんか侵入しやすいですよ」

志貴さんにはタマモさんがいるから指示しなくても平気だろう。それを考えると呪術を使うタマモさんに全て任せておけば良かったかもしれない。

まあ、私の頼みを聞く人（狐？神？）ではないか。

ペタペタと札を貼つてると思ったのだが、何でノリとか使っていないのにこの札は貼れるんだろう。深く考えたら負けかな。

「な、何やってるんですか？刹那さん」

「ム……………これは式神返しの魔導師です」

お嬢様が誘拐されそうになったというのにネギ先生がのほほんとやって来た。神楽坂さんもいる。

どうやら話をしたいらしくフロントに備え付けてあるソファの方へ行くと、既に貼り終えた志貴さんが新聞を読んでいた。

「ん、ネギ坊主達か。神楽坂、俺にも何か飲み物をくれ」

「コーヒーでいいですか？」

「あ……………神楽坂さんに話しても？」

「は、ハイ。大丈夫です」

志貴さんの分だけでなく私の分まで神楽坂さんがコーヒーを持って来てくれたのだが、私はその……………コーヒーが苦手なのですが。三人？と対面して話すには志貴さんの隣に座るしかなくて腰を下ろすと、タマモさんに間に割り込まれた。

視線が合うと少し笑われたような気がして苛立ったのは秘密だ。

「先に紹介をしておこう、この狐は俺の使い魔で名前は――」
「名前はタマモ。好きなモノはご主人様で目指しているのは良妻狐です」

あ、ネギ先生達がちょっと引いている。

それもそうだ。いきなり好きなモノが自分のご主人様と言い、明らかに妻になりたいですと言っているのだから。

「刹那、あのオコジヨはカモだ。変態だから気を付けろよ」

「分かりました。カモさんは変態、と」

「ちよつと志貴の兄貴!？」

「何を焦ってるのよ、その通りじゃないエロガモ」

「姐さんまで!？」

「酷いですよ皆さん!カモ君はちよつとだけ他のオコジヨよりもえつちいだけなんです!!」

「兄貴iiiiiiiiiiii!!」

四面楚歌の状態のカモが号泣していた。

人払いの結界をタマモさんが造ってなければ大変な事になっていたかもしれない。

というかネギ先生が止めを刺すとは。子供というのはやはり残酷だ。じゃあ早速本題に入るとしよう。

「敵が強行手段を使ってきた今、このままでは木乃香お嬢様にも被害が及びかねません」

「それなりの対策をしないとイケないのね」

「ええ。しかしネギ先生は優秀な西洋魔術師と聞いていたので上手く対処してくれると思っていたのですが……意外と対応が不甲斐なかつたので、敵も調子に乗ったようです」

「あうっ……………スミマセン。まだ未熟なもので」

ダンッ

それは真面目な会話に似つかわしくない音で、その音の発信源は志貴さんだった。

志貴さんの握りこぶしがテーブルに乗っているから叩いたんだろう。

「未熟を理由に逃げるな。そんな事じゃ夢なんか叶わねえよ」

「あうっ」

「スマン、続ける」

あまりネギ先生の事を好きないように見えないのに、志貴さんが忠告した事がびっくりだ。

喉を潤そうとコーヒーを飲んでみたけど、苦みがやっぱり苦手で一口でソーサーに置いた。ミルクとかないな。

「私達の敵はおそらく関西呪術協会の一部勢力で、陰陽道の“呪符使い”そしてそれが使う式神です」

「簡単に説明すると日本独自の魔法“陰陽道”を基本とし、呪文を唱える間無防備となる弱点を持つ」

「それで西洋魔術師が従者を従えているように、上級の術者は前鬼や後鬼という式神をガードにつけているのが普通なんですよ」

私が説明したのを志貴さんとタマモさんが引き継いでくれたので、随分と喉が楽だった。

あと神楽坂さんが後鬼を台所にいるアレと勘違いしてるけど、まあいいだろう。

そして今頭痛の種が。

「さらに関西呪術協会は我が京都神鳴流と深い関係にあります」

「神鳴流はとても強く、そうだな……上のクラスになるとタカミチぐらいになる」

「それと手を組まれたら厄介すぎるんですよ。私達とかなり相性悪いですし」

「って事はその神鳴流つてのが敵にいるという事!？」

「今の時代、そんな事は滅多にありませんが用心した方がいいかもしれないですね」

それに彼らにとって私は木乃香お嬢様を守る為とはいえ西から抜けて東についた“裏切り者”。

でも私の望みは木乃香お嬢様を守る事だから仕方ない。

なんて考えてると志貴さんに頭を撫でられた。

昔はいつも私やお嬢様が泣きそうになったり、悩んでいると助けてくれた少し固い手。それが今とても懐かしかった。

あの頃に戻ったような気がする。

「私は……お嬢様を守れば満足なんです」

「刹那さん……」

「桜咲さんが木乃香の事を嫌ってなくて良かった、それが分かれば十分!! 友達の友達は友達だからね、私も協力するわよ」

神楽坂さんの気持ちが今は嬉しい。

こんな風に素直に自分の気持ちを言ってくれる人がいれば木乃香お嬢様も大丈夫だろう。

いきなりネギ先生が私と神楽坂さんの手を取り円陣を組んだ。志貴さんは頑なに拒んで背を向けているが。

「よし、それじゃあ決まりですね。3 - A 防衛隊結成ですよー!!」

「えー!? 何その名前……」

「関西呪術協会からクラスの皆を守りましょうー!!」

本当は志貴さんも加えて円陣をしたかったのだろう、ネギ先生が志貴さんの背中をジッと見ている。

ただどあの人はこんな事をするような人じゃないし。

「……………外を見回ってくる」

「あ、僕も行きます!」

武器を振るうは誰が為（後書き）

ようやく次回で戦いらしいのが出来るが殺りすぎないようにしな
いとな。

というか俺の相手は誰がするのやら。

戦闘開始（前書き）

久々の更新だ。

つたくバイトが忙しいからって更新速度を落とすなよな。

こんな駄文でも待ってくれる読者がいるんだから。

戦闘開始

志貴 side

さて、これから敵がようやく出て来る訳だが俺の相手は誰がするのか。フェイトが出て来るとは考えにくいし……有り得るのは小太郎だがイレギュラーという事も有り得る。

前者二人なら力が分かっているからいくらでも対処出来るんだが、イレギュラーとなると厄介かもしれない。

最悪魔眼を使つての戦闘か。

まあどちらにせよ血沸き肉踊る殺し合いが出来るなら誰でもいい。

敵が戦闘をするのは木乃香誘拐後の駅前という事になる訳で、俺がこうして見回りしている必要はないんだよな。

だから今はネギ坊主と別れてボケーツと月を見ているとこだ。

満月には不思議な力が宿するというが、その力の恩恵を受けるのは俺達なのかそれとも敵なのか。

「前々から思ってたんですけどご主人様って、この世界の流れを知っているんですか？」

「まあそれなりには知ってるが」

所々が記憶から抜けていてあまり使えないがな。

「だが、俺というイレギュラーが混ざる事でこれからどうなるかは分からん。世界が俺を駒として流れに組み込むなら対になる駒を用意するはずだが」

「そして私の分も、ですね」

タマモの対になりそんな敵だなんて想像しにくいが、それでも強い

事だけは理解出来る。なんせタマモ自体が神だからな。
神殺しが出来るなら楽しめそうだ。

人気がないからかタマモが人の姿になる。どうでもいいが人気って
言葉を字で見るとつい“にんき”と読んでしまつのは俺だけか？
人気にんきがないからかタマモが人の姿になる……………どんな状況だ。
あれか、子狐ではあまり客受けしないからアダルトな姿になりまし
たってか。

なんてくだらない戯れ事だ。

しかし今はくだらない戯れ事を考えるかタマモと話すぐらいでしか
時間を潰せない。

携帯ゲームでもあればマシなんだがな。

「暇そうですねご主人様」

「實際暇だからな。流れを知っているというアドバンテージを活か
すなら後手に回らないといけないし」

「先手を取らないんですか？」

「お前は馬鹿か？」

それなりに強くタマモの額を叩く。

俺が持つアドバンテージを利用して先手に出れば、その後の流れが
絶対に変わってしまうだろう。そうなってしまえばアドバンテージ
を全く活かせなくなってしまうじゃないか。

今回の襲撃で立てておかないといけないフラグは。

神楽坂のアーティファクトの使用。

敵の神鳴流の出現。
三人がキレル事。

のだいたい三つだ。これをしておかないと後の流れでどう組み込むかが問題になってくる。

それで俺が立てるフラグだが考えるに。

俺とタマモの敵が出現（タマモは使い魔だから人でない可能性が高い）。

実力の主張。

出来る限りギリギリまで追い詰める。

になるだろう。

まず一つ目は俺がいる事自体が既にバレているからクリアしているはず、二つ目はやっておかないと味方側を上手く操る事が出来なくなる、最後は流れに合わせるのと次の襲撃に期待する為だ。

二つはしっかり立てておけば後で必ず回収出来るからしておかないとな。

「ご主人様、携帯が鳴ってますよ？」

「おおっ！？」

ちよつと考え事をしすぎたな。

さてようやく木乃香誘拐イベントスタートという訳か。

『すみません志貴さん、木乃香お嬢様をさらわれてしまいました』

「分かったすぐに合流する。絶対に逃げられるなよ」

『はい！！』

タマモを抱き抱えてホテルの近くにある駅へと駆ける。
普通一人で逃げるならわざわざ遠い場所を選ぶよりも近い方を選ぶはずだ。

町並みに合わせて走るには限界があるな。

一度の跳躍で周囲の建物よりも高く跳び、空気を足場にして縮地で目的地まで一気に駆け抜ける。

最初からこうしておけば良かった。

視界の端に人一人を抱えているでかい猿の着ぐるみが映った。アレだな。

刹那達は……… 10メートル離れてるが何とか追い付ける距離だ。

「先回りするぞタマモ」

「はい、この方角からするとあっちの電車です」

ナビされた方角へさらに跳ぶ。

くっ、敵の方がどうやら先に電車の中に入ってしまったみたいだ。

「志貴さん」

「「両儀先生」」

電車の中に入ると同時に刹那達と合流して着ぐるみを追い掛ける。
敵が振り返りこっちを見た。

チッ、確か原作ではお札から大量の水を出すんだっただか。
急いで黒鍵を投影して投擲しようとするが。

「お札さんお札さん。ウチを逃がしておくれやす」

その言葉を鍵に札から大量の水が、それも車両一つを埋め尽くす水

が溢れ出した。札からはどんどん水が出て外へ外へと向かう圧力で窓ガラスが割れそうなぐらいにたわむ。

敵だけが次の車両へ移っていて水の影響がない。このままだと俺達だけが溺れてしまう。

魔眼で殺すのは難しい／魔法を使うか？／それよりも他に使わせるべきか／ネギ坊主は溺れてる／タマモも溺れてる。

こうなったら原作通り刹那にこの状況を打破してもらうしかない。

俺が刹那の方を見ると同時にその双眸が力強く開かれ、夕風が振るった事で生じた衝撃波がドアを破壊する。

斬空閃。

車両内の水が外へ排出されると同時に電車が止まった。

「み、見たかそのデカザル女。嫌がらせは諦めて大人しくお嬢様を返すがいい」

「ハアハア……なかなかやりますな。しかし、木乃香お嬢様は返しまへんえ」

敵が口にした“木乃香お嬢様”にネギ坊主達が反応し、その一瞬の隙について敵が逃げる。

追い掛けながら今回の裏をネギ坊主達に話すでしょうか、ここまで関わった以上は知る必要があるからな。

木乃香を関西呪術協会の影響の届かない東、麻帆良学園へ入れた事を面白くないと思う奴が関西呪術協会の中にいた。

その内の一人、もしくはそいつ自身が今日の前を走っている奴かもしれない。

そしておそらく、奴は木乃香に眠る力を利用して関西呪術協会を牛耳るうとしているのでは、というのが見解だ。

今回の敗因は刹那も翁も修学旅行中に誘拐などしない、と甘く考えていたとこだろう。

関西呪術協会は殺人などの裏仕事も請け負う組織、こんな風に強行手段に出てもおかしくはなかったのにな。

「フフ……よーここまで追ってくれましたな」

駅を出て近くの階段で敵が着ぐるみを脱いで待っていた。もう逃げられないと観念したのか、それともここで迎え撃つつもりなのか。まあ罠を張って逃げようとするって分かってるけどな。

ちなみに着ぐるみを脱いでいる。

「三枚目のお札ちゃんいかせてもらいますえ」

「おのれさせるかっ！」

敵が札を構えると同時に刹那が駆ける。中々早いが間に合わないだろう。

小声でタマモに打ち合わせしておく。

「俺の合図に合わせて密天を使え」

「分かりました」

「喰らいなはれ三枚符術京都大文字焼き！！」

俺達の行く手を阻むかのごとく巨大な炎が大文字を描き、その熱波

で刹那が怯む。
だがそれは識っている。

「今だ！」

「呪相・密天！」

掛け声に合わせて突如吹き荒れた暴風が炎を喰らい、全てを霧散させる。

最後の切り札をいきなり破壊された事で敵が驚きを隠さず茫然自失しているのを逃さない。

タマモを地面に下ろして一陣の風となる。

「させるかいな!!」

それまで只の着ぐるみだと思っていた猿がいきなり動き出し、俺の前に立つ。しかも熊の着ぐるみまで追加されていた。こいつらが貴様の前鬼後鬼か。

七夜を投影しすれ違い様に銀光を2閃。

閃鞘・四辻。

斬殺された猿と熊は元の姿だった紙へと戻る。さあこれでお前の守りはなくなっただぞ。

「わ、私達も行きましょう！」

「はい（そうだったわね）！」

お前ら、木乃香を助け出そうっていう気概はどこへいった。俺の戦いに見とれている場合か。

もう守りは崩したかと思ったが敵が再度式神を2体召喚し、神楽坂

へと向かわせる。

そして俺と刹那の前に2人の少女。
刹那の相手は月詠だというのは分かるが俺の相手はいつたい。

髪は後ろで一つに結び、服は月詠がロリータ服なのにに対しゴスロリ服という見た目をしている。

得物は太刀と小太刀。

こいつが俺に用意されたイレギュラーか。

これでタマモ用のイレギュラーがいる可能性が高まったが、この場には姿を現していない。まあ存在そのものがないのかもしれないが。

「それにしてもお前も神鳴流とはな」

なんだってこんなに神鳴流が護衛に就いているんだよ。そんなに神鳴流の奴らは暇してんのか。

「ウチは伽具夜います。志貴はんよろしゅう」

「敵と馴れ馴れしくなるつもりはない」

「似た者同士ですえ？私達」

だからといって仲良くなる訳ないだろう。同族嫌悪、そんな言葉があるんだからな。

戦力は………刹那より上、素子よりは下。しかし得物からすると月詠同様の戦い方をすると見るべきか、太刀で出来た隙を小太刀で埋める戦い方か。

それにしてもさっきから感じるこの嫌な気配、禍々しいとも言えるような気配はなんだ。こんなのを人間が出せるのか？

悪魔みたいな気配。

刹那同様、人じゃないのかもしれない。

「そないに熱っぽく見つめられたら照れてしまいますえ」

「ふん、さつさと殺るぞ」

「止めまへん？お仕事やけどウチは志貴はんと殺りたくありまへん」

「無理だな。俺も仕事だし、お前達が連れて行こうとしているアイツは俺の妹みたいなもんなんだよ」

伽具夜がため息を一つ吐く。

こいつは本当に今の説得で俺が止まると思っていたのか？だとしたらこいつも甘過ぎる。

俺は甘いものはあまり好きじゃないんだ。

「残念やわ、志貴はんは結構ウチのタイプやのに」

「その言い方だと俺に勝てるみたいない言い方に聞こえるが」

「それはやってみないと分かりまへん」

チ、戦力は戦うその時まで温存しておくタイプか。こういう奴は厄介なんだよな。

俺は七夜を、伽具夜は太刀と小太刀を構える。

互いの殺気がぶつかり合い空気が悲鳴をあげ、空間が陽炎のように揺らぐ。

タマモは大量の小猿達に苦戦しており、他の奴らも苦戦しているから助けは入ってこないな。なんて好都合だ。こんな敵と横槍などなしに戦えるんだからな。

七夜を投擲し次の七夜を創り直す。

伽具夜は首を横に動かすだけで七夜を躲して接近してくる。俺も一

気に距離を詰めていく。

太刀を受け流し小太刀を受け止める。

それなりに強く七夜を投影しているが神鳴流の一撃を受けきれとは思えない。

互いの攻撃が当たらないからか伽具夜は小太刀を主体にし、太刀はあまり使わなくなってきた。太刀を多用していると俺の攻撃を防ぎきれないと考えたか、それとも一撃必殺を放つタイミングを待っているのか。

「はあっ！」

小太刀を弾き飛ばしたが無理な体勢だった為か左脇ががら空きになってしまい、そこへ伽具夜の太刀が必殺の威力を以って襲ってくる。

それは俺が用意した隙だという事に気付きもしないで。

太刀と左脇の間に巨大な斬馬刀を投影し、楯にして必殺の一撃を防ぐ。

伽具夜に焦りが生じた。

閃走・一鹿。

後ろ回し蹴りを伽具夜の腹に叩き込み、さらにその足で顎を蹴り上げようとしたが最後の一撃は躲され、距離を離された。
今ので沈めよな。

「やっぱり強い人やわ。なかなかウチの攻撃が当たらないんやから」
「お前だつて結構強いじゃねえか」

閃走・一鹿で確実に腹に入っただはずなんだがダメージに全然なつて

いないとは。腹に雑誌か何かを仕込んでるんじゃないか？まあ蹴った時の衝撃が柔らかかったから何も仕込んでないのは分かるが。

「痕になってたら責任取ってもらいますえ」

「ほざけ！」

再度斬り結ぶ。

太刀は腕を抑えて防ぎ、小太刀は七夜で受け止める。伽具夜のモチベーションが上がってきたのか攻撃のペースが上がり、俺は防戦一方だ。

防げない攻撃で体中に赤い筋が入っていく。

呪薬と呪符でも使って口を利けんよにして、上手いことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな。

分かってはいた言葉にこうも苛立つのは俺が木乃香達に情を寄せていたからか。まったく熱血なんて俺の性に合わないんだがな。

あの台詞が出たからには伽具夜との戦いもこれで終わらせるとしよう。

伽具夜が見せた一瞬の隙を逃さず得物を弾き、横を駆け抜けけると同時に縦と横の斬撃を防御を無視して放つ。

鐘楼・清姫通し。

清姫通しを喰らった伽具夜が動かなくなったのを確認し、猿女の元へ向かう。

まずネギ坊主の風花武装解除で着ている服全てが花びらとなり、木乃香も手放したところを神楽坂がハマツルギ（ハリセン）で頭を叩き、怯んだ隙に刹那が百花繚乱で上空へ弾き飛ばす。

タマモはまあ……連撃に参加しないか。

止めは俺がもらうぞ。これでもさっきの言葉に腹が立ってるんでな！

サマーソルト気味に空中で一回転しつつ横薙ぎの一撃を放ち、刹那達から距離を空けるように吹き飛ばす。

玻璃の月舎迦。

弾き飛ばされた猿女は伽具夜と月詠を連れてどこぞの怪盗みたく夜空に消えていった。

「お前ら、危険だから追い掛けるなよ」

「それよりもあの子の調子を見た方が良いんじゃないですか？」

タマモが皆にそう言うが猿女は薬や呪符を使っていない。というかそんな余裕はなかっただろ。

風花武装解除で裸になってしまっている木乃香に俺が着ている羽織りを被せ、一応大丈夫かどうか調べる。

「ほら、そんなところで寝てたら蹴り飛ばすぞ」

「志貴さん！」

いや、目の前で地面に寝てる奴を見たらこう言っべきだろ。俺は。気が付いたのか木乃香が虚ろな目で刹那を見る。

「……………あれ、せつちゃん？」

「もう大丈夫です木乃香お嬢様……………」

「良かった——せつちゃん…………ウチのコト嫌ってる訳やなかったんやな——」

「えっ……………そ、そりゃ私かてこのちゃんと話し……………」

そこまで言い、刹那は自分の口調が昔のものになっている事に気が付き詫びた。それからは何を言いたいのがよく分からないような事を口にして逃げやがった。

俺がいない間に何があっただんだか。

さて俺も帰るとするか。ネギ坊主だけでなく俺までいなくなっている事に新田先生に知られるとマズそうだ。

「桜咲さーん！明日の班行動一緒に奈良回ろうねー。約束だよーっ！ー」

やれやれ若いつてのはいいね。

刹那の背中を色んな思いを込めて軽く叩く。お疲れ様、しかし次はもっと上手くやれよ。

子狐になったタマモの頭を撫で、ねぎらってやる。

確か明日の予定では……………宮崎のどかがネギ坊主に告白するのと朝倉に魔法がバレるの二つか。
また俺の出番はなさそうだな。

戦闘開始（後書き）

さてさて、本当に明日はどつするかね。

暇（前書き）

新年明けましておめでとう。

今年もこの作品をよろしく頼む。

今回から少し書き方を変えてみたからどんなものかね。あと、短
いからな。

暇

志貴side

さて今日は修学旅行二日目だが俺はどうしたもんかね。宮崎のどかがネギ坊主を誘い、ネギ坊主はそれに答え………それに俺が参加したら明らかに戦力過剰だし何かあると思われるからな。

やはり俺は普通に生徒達の見回りとするしかないか。

よし、全員ホテルから出て行つた。

一応見送ってから確認したからいないのは分かってるんだが、しておかないと新田先生とかに怒られるんだよな。

ロビーに行くで見回り組の先生が残っていた。新田先生は分かるんだがしずな先生も見回り組だったのか、生徒受けしそうだと思つたが。

「両儀先生、誰も残っていませんでしたか？」

「俺が見た限りは残っていなかったですよ」

わざわざ気配探知までしたんだ。

「私達も行きましょうか。ちなみに何処を見回りますか？」

「だったら二人は観光地名所を回って下さい。俺は他に行きそうな場所を見ますから」

「そつえば両儀先生は関西出身でしたな」

そついった分け方をすれば結構な範囲をカバー出来るだろう。

こついった修学旅行に行くと色々ガが外れて問題行動を起こす奴がでるかもしれん。まあそついう奴がいないのは原作で知っているんだが、形としてはな。

という訳で俺達もホテルを後にした。

とりあえずは行きそうな場所を見て回るとして、どこから行くべきか。

ブラブラ歩いていると誰かが尾行している気配を感じた。足音、気配、それがさっきから一定の距離を保ちながらついて来る。

気付いてないフリをして何処かで撒くか、正体を確かめるべきか。丁度近くに裏路地があつた。

急いで裏路地に入り肉体を魔力で強化し、左右の壁を蹴り上空へ跳ぶ。

尾行していた奴が路地に入ったと同時にその背後へ回りつつ、左腕の間接を極めながら投影したナイフを頸動脈に押し当てる。

「何者だ。何で俺を尾行する？」

「あたたたたた。ギブやギブ」

このはんなりした口調は伽具夜か？

尾行してきた奴が伽具夜だと分かってても極めた腕とナイフは離さない。こいつは敵だから油断だけは出来ないからな。

それにしても俺を尾行していたのは伽具夜だけなのか？ いや確かに気配は一人だけだったが普通尾行をするなら二人以上でするはずだ。

出て来ないのは伽具夜を危惧してか？

「志貴はんを尾行しとったんはウチだけですか？」
「敵の言葉を信じるか阿呆」

これはタマモを連れて来るべきだったか。あいつには刹那達と一緒に行動させ、有事の際に備えてもらっている。

それにしても伽具夜が言っているのは本当なのか？ 捕まえてから結構時間が経っているし、伽具夜自体が武器を持っているように見えない。

どうしたものかね。

「なんか裏路地でこうしているとウチらいけない事してるみたいや」

そう言われて俺はすぐさま伽具夜から離れた。

ちよつと息が荒くて顔が赤いのが恐い。絶対に伽具夜は俺の天敵だ。気を抜いたら性的な意味で食われるかもしれない。

「志貴はん、ウチはオツケーやで？」

「やられる前に殺った方がいいな」

一気に殺せるように直死の魔眼を発動してナイフを構える。俺は何時でも戦闘を行える態勢を作っているというのに、伽具夜は一向に構えずニコニコしている。

本当分かりにくい奴だ。

「まあ、遊びはここまでにして本題に入りましょ」

「……………本気の間違いだろ」

「ウチとデートしまへん？」

よし、戻って見回りに行こう。

そう思って踵を返し来た道に戻ろうとしたら腕を組まれた。腕に

伽具夜の胸が当たってる。

……………こんなところを生徒や先生方に見られたら色々マズイな。

「俺は仕事なんだが」

「そんな気にせんで行きましょ。ウチは話したい事ありますし」

「だから俺は仕事だからお前と話す余裕なんかないんだよ。こんなでも先生だから生徒達を見回りしないと」

「ふむ、せやったら代わりがおつたらええんやね？」

そう言うなり伽具夜は紙切れを取り出し、俺の名前を達筆な文字で書いた。すると紙切れが一瞬光り、少し間抜けな俺になりやがった。

これはネギ坊主の唇争奪戦に使われたあの身代わりの術か？ もしもそうだとしたら今すぐにでも殺さないと。

「下手な奴が使ったら完全にアカンのが出来るんやけど、ウチのは大丈夫やから安心したって」

「それは信用出来るのか？」

とはいえ伽具夜は神鳴流の使い手だから陰陽にも精通しているはず。だからって敵を信用するのな。

これからどうするかを考えていると、伽具夜の顔が輝いていた（例えるなら力。八先輩だな。あの人が何かの間違いでこっちに來ないものか）。

「ああ……………真剣な志貴はんもええわあ。そのまま踏まれたいわ」

その発言に思い切り引く。物理的にも精神的にも。

一応俺はSで虐めたりするのが好きだが、こつちも開けっ広げにドM発言をされたらいくら俺でも引く。

なんて考えてるが結論はもう決まっている。少しでも伽具夜というイレギュラーを理解する為にこいつの誘いに乗るという、な。それにイレギュラーが追加されている敵側の戦力を聞き出せるかもしれない。

「はあ……………それで何処に行くって言うんだよ。あまり人に見られる場所には行けないぞ……」

「せやったら……………ラブホ？」

「まずはそっち方面で考える頭を直してから出直してこい」

見られたらマズイってのに、更にマズイ状況を作ろうとするとか馬鹿だろ？

本当に伽具夜の頭の中にミソは入ってるのか、凄い気になるが解体してもな。

「この時間帯で人目に付かない言うたら、アングラな場所ぐらいしかありまへんえ？ それでええんやったら案内しますけど」

「それでいい」

だいたいこの辺りだと観光用に街を色々と弄ってあるからどうしても人目に付いてしまふ。だから伽具夜が言うのはもっともだ。

アングラって言えば違法を認め喰つか喰われるかを愉しむ場所を指すんだが、俺が伽具夜に連れて来られた場所は文字通りアングラ

グラウンド（地下）だった。

少し暗い空間。

小洒落た音楽にライト。

素晴らしい香りの珈琲。

地下に建設された普通の喫茶店かよ。

まあよく考えれば観光地になっている地域にアングラなモノを作る訳ないか。法治国家だぞ、ここ。

「ウチみたいな格好のが本物のアングラな場所に入れる訳ないやん」
「確かにつまみ出されるのがオチだわな」

とりあえず空いている席に座る。

雰囲気が良いが味の方はどうなんだろうな。片方だけ良くてもし片方が悪いなんてのは勘弁してくれよ。

俺達は普通にサンドイッチと紅茶を頼んだ。

「さて本題に入ろうか、何で俺を尾行していた？」

「まあまあ、早過ぎると嫌われてしまいますえ。もう少しゆとりを持ったらどうです？」

だから何でこいつはこうも下ネタを吐くんだ。黙ってれば充分に可愛いと思うんだがな。

中々訳を話さない伽具夜に内心苛立ちながら時間が過ぎていき、頼んだ物がやって来た。

紅茶はまあまあ、サンドイッチもまあまあ。及第点と言えば及第点だが、店の雰囲気とは合わん。

「ほな本題に入りましょ……………志貴はん、ウチらの上に立ちまへんか？」

またその話かよ。

アレ以来そう言う奴はいないと思ってたのに。

暇（後書き）

つとに、回を重ねる度にどんどん伽具夜が分からなくなってくる
……… ってもまだ全然出てないんだがな。

このまま変態の道を進んで行ったら別の意味で戦いたくねえな。

とりあえず作者のケツでも叩いて次の話を急いで書かすか。

告白イベントの傍ら（前書き）

作者の奴が更新を止めてて済まない。代わりに謝る。

遅れた割に短いのは勘弁してくれ

告白イベントの傍ら

志貴 side

「志貴はん、ウチらの上に立ちまへんか？」

今更その言葉を言う奴がいるとは。いや、古巣に帰って来たからこそまた言ってきたのか。

ウチらの上。

つまり関西呪術協会のトップという事だ。何故こいつらがこんな事を言うかというと、

翁によって近衛家に迎えられた事

木乃香と年齢が近かった事

魔眼持ちだった事

の三つに加え、何より、

九尾の狐を式神にした事
タマモ

というのが大きい。

こいつらの中には九尾の狐を崇め奉る奴らが沢山いて、そこへ俺という存在が現れた。後は分かるな？

確かに関西呪術協会のトップに立つというのも面白いかもしれんが、強大な権力を持つとそれに見合った束縛が生まれてしまう。それでは殺人鬼として行動出来なくなってしまう上に、自由に生きる俺にとっては苦痛だ。

それに俺は人の上に立つ人間じゃない。底辺でどぶさらいとかするのが似合う人間だよ。

……………今は教師をやってるがな。

だから今までこの手の誘いは断ってきた。それでもしつこく勧誘してくる馬鹿は俺が口封じしたり、タマモが始末していたそうだ。多分だが翁や長はこの事を知っている。それでも俺に何か言っこないのは、きっと消してきた奴らが関西呪術協会の中でも過激派だったからだろう。何度か関東とやり合った奴らだったらしいからな。

「それで、答えを聞かせてもらえます？」

「答えは否」

昔からそう言ってきたから伽具夜も断るのが分かっていたのか、伽具夜も簡単に折れてくれた。

「分かっとなけど即答とは堪えるわ」

「何度も言っただ、その内容は何度尋ねられても変わらない」

どうせやるなら他人の力なんか借りずに戦えよな、それに無関係な奴を巻き込むんじゃねえ。

悪をやるなら誇りある悪をやれ。

誇りのない悪などそれはただの我が儘でしかない。優雅さのない悪など見ているこっちが嫌になってくる。

「それじゃあ、ウチと恋人になってくれまへん？」

「……………何がそれじゃあ、だよ」

何で俺はこうもアウトローに懷かれるんだよ。タマモしかり、伽具夜しかり。

「1目惚れしたんや」

「気持ち嬉しいんだけどよ、それに答える事は出来ないんだ。俺達は敵同士だろ」

「せやからウチらの上に立ってほしいんや」

伽具夜が俺達側に回るといふ考えには至らないのだろうか？

まあ、来たとしても色々問題が起きそうだから来ないでほしいがな。タマモとかタマモとかタマモとか、それに木乃香と刹那がもしかしたら、な。

「……………その考えは思いつかんかったわ。ほな、お仕事終わったら志貴はんの味方になるか」

「いや、頼むから来るな」

思わず頭を下げ拒否の念を示す。伽具夜といえるのは楽しそうだが、その分どれだけ疲れる事やら。

伽具夜は頬を膨らましてつまらなそうにしている。こいつは俺がオーケーを出すと思ってたのか？

そうだとしたらどれだけお目出たいんだ。

「志貴はんはホンマにいけずやわ」

「いや、断っただけでそんなに言われてもな」

「せやけどウチは諦めへんからな。絶対に振り向かせたる」

まあそれなら、俺は止められないな。そうするのは伽具夜の勝手

だし。

あまり有益とはならない会話をいくらかして、俺達は別れた。普通に別れて良かったのか、と思いはしたけどその内必ず会うんだからいいだろう。

加具夜 side

はあ、やっぱり志貴はんは仲間になってくれなかったな。残念と言えば残念やけど、これはこれで良かったわ。

志貴はんと戦えるんやからな。

「ふふふふ」

思わず笑いが零れてまう。

あないに死の匂いを纏ってるんねやから、絶対に志貴はんは強く殺しに長けてるはずや。そないな人と戦えるのはめっちゃ嬉しい。

依頼主に頼んで、志貴はんと戦うのはウチにしてもらおか。月詠や少年やったら勝てんやろから選ばれんけど、あの子は強いからあの子が志貴はんと戦うかもしれん。

そしたらウチの楽しみがなくなってまう。志貴はんと戦えんかったら、依頼主と手を切るかな？

そいで志貴はんの仲間になるんや。

「あゝ、でもタマモはんが邪魔やな」

志貴はんの使い魔にして、最強の守り手。更に九尾の狐やから手に負えん。

ウチが志貴はんに近付いたら、タマモはんが絶対に良い顔せえへんよな。どうしたものか。

仲間になるんやったらタマモはんが1番の障害や。木乃香嬢や桜咲の嬢ちゃんやったらまだ何とかなるんやけど、タマモはんだけは難い。

どうしたものかなあ。

「加具夜はん、何を考えてはりますの？」

「月詠、おったんなら1言言いや」

どうやら考え事しとったからか、月詠が来てた事に気付かんかったみたいや。

ウチの心をそないに占める志貴はんは、やっぱりいけずやわ。

「志貴はんの事やる？」

「そや。何か文句あるんか？」

「ややわゝ、そないな目で見られたら加具夜はんと戦いたくなつまう」

「別にウチはええで」

「……………止めときましょ。ウチは刹那先輩と、加具夜はんは志貴はんと戦いたいのに怪我したら出来なくなつまう」

月詠の言う事も1理ある。

負ける気はせえへんけど、怪我せんとも言えんからせんのが正しい。

せやけどこの疼きはどうしらええねん。自慢やないけど、ウチは

あまり我慢強くないで？

志貴はんに慰めてほしいわ。

— s i d e

ゾクッ

「うおっ!?!」

加具夜の危険な考えが伝播したのか、志貴が悪寒に震えていた。

告白イベントの傍ら（後書き）

はい作者の黎音です。

リアルが忙しくて全く更新出来なかった上、短くて申し訳ない。

加具夜……………何でこうなった、な回ですね。した以上は回収しないと。

現在志貴に好意を持ってるねは、タマモに木乃香、刹那、加具夜という状況ですが……………タマモなのかなあ

修学旅行三日目

志貴 side

結果報告だけすると告白イベントと、ネギ坊主の正体がバレるイベント、カモの仮契約イベントは何とか原作通りに進んだぞ。イレギュラーは何もなし。

俺は翁と長から木乃香に魔法がバレないように、と言われてるの
でカモの奴をとりあえず説教と罰を与えた。

しかし反省した様子が全くないので、これからも何らかの行動を
起こすだろう。

それで木乃香が魔法を知ったら俺の責任か？
ネギ坊主に責任がいくと助かるんだがな。

そして修学旅行三日目。

ここで一気に修学旅行編は駆け抜ける訳だが、昨日と同じで俺は
どうしたもんか。刹那達に着いていたいが………ネギ坊主達が別
れた後に合流するでしょう。それなら問題ない。

今日は完全自由行動日だから、生徒達の活気が何時も以上にある。
若いつていいな。

「年寄り臭いですよご主人様」
「俺にあんなテンションは無理だ」

肩に乗せている子狐状態のタマモが呆れながら言う。
性格つてのもあるんだろうが、それでも俺にとっては若さが一番

関係してるんだと思うが。

「ご主人様もまだ若いんですから、そんな枯れてる事言つと本当に枯れてしまいますよ?」

「別に異性にあまり興味ないしな」

「そ、それは困ります!」

いや、異性に興味が全くない訳じゃないぞ。他人と比べたら興味がない部類つて意味だったんだが、俺は殺人出来れば良いし。

「そつえばあの小僧を叱らなくていいんですか?」

「俺以外にも叱る奴がいるからいいだろ」

ここで叱つて後に響いてもらつては困るしな。それだつたら神楽坂に任せた方がいい。

さて今日はどこをどう見回るべきか。あまり木乃香達から離れないように行動しないといけない訳だが……………

「おや両儀先生、どうしました?」

「これは新田先生。いえ、今日はどの辺を見回るか考えていただけです」

「今日は生徒達と行動しても構いませんよ。両儀先生は最近入ってきたばかりで、あまり生徒達と馴染んでいないでしょう」

「いいんですか?」

「ええ、見回りは私達に任せて行つてきて下さい」

それだけ言つと新田先生は瀬流彦先生達の方へ行つた。

やっぱり良い先生だよな。

生徒からすれば確かに色々と言つるさい先生かもしれないが、そ

れだけ生徒の事を思っで行動しているという事で、俺からしたらかなり好印象だ。

あんな先生がいるから皆は腐らないで済んでいると気付くべきだよ。

新田先生にああ言われたがどうするか。

「あれ、志貴先生どうしたの？」

「何しているのですか？」

「早乙女に綾瀬か。いや、今日は自由行動していいって言われたから、どうするか考えていたんだ」

そう告げると早乙女が提案してきた。

「だったら先生も私達と行動しない？」

「……………何が目的だ？」

「お見通しか」

んなあからさまに怪しい提案してきたら、普通誰だって疑うだろう。俺とあまり繋がらないんだから。

繋がりが無いってのは他の生徒にも言えるけど。

「先生って桜咲さんと知り合いですよね？ 先生がいれば少しは桜咲さんも落ち着けると思うです」

「そついう事か」

それならそつと早く言え。変に疑うだろうが。

あと分かってたけど神楽坂、簡単に見付かるなよな。いや、刹那がいながら隠密行動出来てないんだから、刹那が悪いのか。

「だから先生も一緒に行こうよ」

「行ってもいいが、奢らないぞ」

「ぶ〜ぶ〜」

「ハルナはそれが目的ですか」

綾瀬、そう言ってるお前に少し残念そうな空気が見えるのは俺だけか？

何はともあれこれで刹那達と行動しても問題ないな。一つの班に、二人の先生が付いてる事を聞かれた時の事も考えとくか。

「それじゃあ先生、後でね」

「分かった分かった」

待ち合わせ場所に行くと、5班プラスネギ坊主が既に来ていた。どうやら俺が最後だったみたいだな。

「遅いよ両儀先生」

「時間はピッタリだが？」

「こういうのは五分前行動しなきゃ！」

「学校生活でもしような」

こら突っ込み係の綾瀬に神楽坂、黙ってないで突っ込めよ。俺一人に全て回収させる気か？

「両儀先生も一緒に行くんですか？」

「早乙女に捕まった。なんだ、俺が来ちゃいけないか？」

ネギ坊主の頭をヘッドロックしながら（身長差がかなりあるからキツイ）、小声で話す。

「お前達が抜けた後に木乃香を見ておくのに、丁度良かったから便乗したんだ」

「あ、そうだったんですか」

「だから親書の件を任せたぞ」

「はい！」

素早く会話を終わらせてネギ坊主を解放すると、早乙女がニヤニヤ笑っていた。

嫌な予感かなりするのは俺だけか？

「それで何処に行くんだ？」

「あ……………京都を見て回る予定ですよー」

「いや、ここはネギ先生の行く所ですよ」

「そうか、ならさっさと行くぞ。時間は有限だから」

「両儀先生の言う通りです」

「あわわわ」

こうして俺達は慌てるネギ坊主達と、京都の町を歩く事になった。

しばらく歩いていると早乙女がゲーセンに入ろう、と言ってきた。いや知ってはいたが、旅行に来てまでゲーセンというのはいかなものか。

テンプレ通りにプリクラを撮らないか、と聞かれたが、

「俺はいい。お前達でしてこい」

こういった記録媒体に残るのはあまりしたくないんだよな。ここでのプリクラが敵に渡って、それを媒介とした魔術を受けそうで。

「えゝ、志貴もウチらと撮ろ。な、な？」

「俺はいいから。あと先生を付けろ」

「木乃香もこう言ってるんだから、先生も撮ろつよ」

「そうですよ志貴さん」

木乃香、神楽坂、ネギ坊主の三人に迫られ……………おい刹那、
“お願いですから一緒に写って下さい”なんて目で見るな。何だっ
て俺にそこまで期待するんだお前ら。

（ご主人様、ここは写らないと駄目な空気ですよ）
（こういうの嫌いなんだよ）

俺がいる証が残るってのが嫌なんだよ……………世界から消える時
は何も残したくないってのに。

ため息一つ吐きながら、プリクラの筐体に向かう。

「一回だけだぞ」

『やったあ』

こんなの写真に写るのが楽しいのかね？

先ずは宮崎とネギ坊主、ネギ坊主と神楽坂、俺と刹那と木乃香、
ネギ坊主と綾瀬と早乙女の順にプリクラを撮った。

今時のプリクラにしては珍しく、画像編集がなくすぐに現像出来
て自分の分を受け取る。

何に貼ればいいのかな。

その後は皆でカードゲームをやり、小太郎の乱入を経て皆が盛り上がり始めたところで、

「じゃ桜咲さんに両儀先生、木乃香の事頼むね」

「はい、二人とも気を付けて下さい」

「下手するなよ」

ネギ坊主と神楽坂を送り出した。宮崎がこっそり着いて行っただけは無視しといたが。

木乃香が早乙女達と楽しんでいる間、俺達は柱にもたれかかりその背中を見詰める。

クラスメートと楽しそうにしている木乃香、それを安堵しながら見詰める刹那。

そんな安堵するならもっと自分の心に素直になれよ。

「あの二人は大丈夫でしょうか？」

「ご主人様に迷惑かかるような事をしてなければいいんですけど」

「刹那、色神を飛ばせ」

「そうですね」

刹那が呪文を唱えると寄り代の紙が光の玉になり、ネギ坊主達の下に向かう。

これで話の流れは正常に進むはずだ。

さて、だいたいの下拵えをしたところでこの視線の主をどうするべきか。直ぐ行動に移してもいいが、それで映画村でネギ坊主が間に合わなければ流れが変わってしまう。

ここは刹那に丸投げしよう。この部分は漫画になかったから、きつと刹那が気付いて行動を起こしたはずだ。

しかし視線の主は中々やるね。一般人の視線と気配に混ぜながら、自分達の存在を上手く隠している。まあ月詠と加具夜なんだろうけどな。

（ご主人様、気付いてると思いますが――）
（分かってるさ。だけど気付かないフリをしてろ）
（了解です）

タマモも気付いていたようだ。

しばらくゲームに戯れていい加減飽きてきたのか、三人がこっちに向かってきた。

さて、動く準備をしないとな。

「ゴメンね先生、待たせちゃって」

「もういいのか？」

「二人をこれ以上待たすのはよくないです」

「そういう訳やから次行こ？……………あれ明日菜にネギ君は？」

「のどかもいいです」

まあ気付くよな。

「さて、何処に行ったかね。まあアイツらも馬鹿じゃないんだから変な場所に行かないだろ」

「ええ、何かあれば連絡すると思います」

刹那と二人で何とか意識を三人から外す。これでもしアイツらを探す、なんて事になったら色々大変な事になる。

アドバンテージを持ち続ける為に、なんとかここは意識を外さなくては。

「……………まあ先生の言う通りかな。それにしても先生は桜咲さんと仲良いの?」

「どうしてそう思う?」

「いや、何か二人して落ち着いてるし考え方も似てるし」

「気のせいだろ。さて、次は何処に行くんだ」

「先生は行きたい場所ないんですか?」

と言われても地元で行きたい場所なんかないぞ。京都を出るまではずっと観光地を巡ってたからな。

しかしこの流れは俺が決めないといけないのかな?

「とりあえず歩きながら決めよか?」

「そうしょっか」

よし、木乃香ナイスだ。

これで物語が俺の知っている通りに進んで行く訳だが、何処で刹那が視線に気付くか。気付かないようなら俺が教えないといけないよな。

ゲーセンから出ると少し熱い熱気に襲われ、頭がクラツとする。

冷房が効いた場所にすぎたな。

極力映画村の方に近付くように皆を誘導していると、何かが飛んで来てそれを刹那が掴んだ。

小声で聞いてくる。

「志貴さん」

「ああ、ついに来たな」

刹那が掴んでいたのは棒手裏剣だったか、鉛筆のような物だ。
白昼堂々襲ってくるのは馬鹿なのか、それとも一般人に気付かれ
ない自信があるのか。

月詠と加具夜の事だからどうせ、

一般人なんか興味ない

とかそんな事を考えてるんだろう。

木乃香の手を刹那が掴み、マラソン大会が始まる。

修学旅行三日目（後書き）

さて、次回で映画村だ。

少しでも先頭シーンが入るから好きな奴は、それなりに期待してくれ。作者が頑張るはずだから。

用心棒は新選組！？（前書き）

残念ながらまだ戦闘じゃないぞ

用心棒は新選組！？

志貴 side

敵の攻撃が始まり、逃げ続ける事数分。流石に早乙女達お荷物を抱えたまま逃げるのは難しく、いつ巻き込むか分からない状況となっている。

走り続けて映画村の入り口へと辿り着いた。

ここなら撮影とか言って誤魔化せるから何とかなるだろう。それに原作通りに進める為にもな。

「悪いが早乙女、ここからは別行動だ」

「すみませんがここで別れましょうー！！」

「え！？」

木乃香を抱きかかえ、刹那と一緒に映画村の壁を乗り越えて中に入る。

どうでもいいが、これは不法侵入だよな？ バレたら後が大変だ。まあその時は長にでも何とかしてもらうか。木乃香を助ける為だった、とか言えば長も強く言ってこれないだろ。

観光の名所たる映画村はやはり人が多い。こうも沢山いると二人殺したくなるんだが、やはりこの場合は高い場所に登って、

見ろ、人がゴミのようだ！

と言うべきだろう。

殺人鬼が見るのか、とか聞かれそうだがジ。リは世界の名作だからいいんだ。個人的にはラ。ユタとト。口が好きだな。

さっきまでと違い人の数が明らかに増えた今、そう簡単に攻撃はしてこれまい。原作通りにここでなら可笑しくない状況を作ってるんだが、さてさて加具夜はどういう風に出て来るか。

「ご主人様、ちょっとお顔が優れませんがどうしました？」

「ああ、いや単に人混みに酔いそうなだけだ」

「大丈夫ですか志貴さん？」

「これぐらいなら問題ないから心配するな」

本当は殺人衝動が出て来たからそれを全力で抑えてるだけだ。こんな状況下で殺人鬼になったらマズい。

大きく腹をへこませながら六秒以上かけて息を吐き切り、鼻から三秒かけて息を吸い込む。これは本来痛みを軽減させる呼吸法だが、今はそんな事どうでもいい。

ヨガの達人は酸素を効率よく消費する事により、呼吸を制限出来る。呼吸をコントロール出来るという事は、全身の隅々まで自分の意志で操作出来るという事。

つまり呼吸法とは身体 of 完全な自己制御を目的とした、一つの訓練法という事だ。

改めて意識してする事で殺人衝動に動かされそうになっている体を、自分の意志でコントロールしようとしている訳だ。

しばらく続けるとある程度体のコントロールが戻ってきた。

「式神との連絡はまだ繋がってるか？」

「いえ、それが切れてしまったようだ」

「となると……後は携帯による連絡のみか」

「魔法使いと陰陽師が携帯ですか。これが時代という物なんですね」

そうは言うが携帯だって不便だぞ。充電しないと使えないし、アンテナが立たないと上手く会話出来ないし。

そっぴや木乃香の姿が見えないな…… ああ、着物を借りてくるんだっか。

「せつちゃん、志貴」

「はい？」

振り返るとそこには原作で見た通りの着物に着替えている木乃香が立っていた。

京都の家にいた頃から着物姿を見ているから見慣れたつもりだが、久々に着物を着た木乃香を見ると“こんなに可愛かったか？”と思うな。思うだけで言わないのは、後が怖いからだ。魔王が降臨しそうになる。

あと刹那、お前は俺以上に着物姿の木乃香を見てるはずなのに、何でそこで見とれる。やっぱりこいつは百合百合なのか？

「ホレホレせつちゃんも着替えよ。ウチが選んだげる——」

「えっ、いやお嬢様っ！ 私こっぴうのはあまり……」

そして刹那は新選組の服に着替えさせられるべく、更衣室へ無理矢理連れ込まれた。こんな状況ではアレだが、少しは楽しんでこい。

早乙女達は………ちゃんと着いてきてるな。お前達がいなくても他の奴らが来れば問題ないが、やはり原作通りに進んだ方がいい。追い付いて話し掛けてくるんじゃないか、と考えていたがおそらく三角関係？ とか考えて話し掛けてこないのだろう。

人混みに混ぜてこつちを見ている視線もまだある。余裕があるんじゃないか。

更衣室と密閉された空間に獲物が入っても、何も行動を起こさないのは余程自信があるとみた。

フェイトの奴が来ているのか？

探してみるがそれらしい気配はない。完全に消しているのか、それとも来ていないのか。

どちらにしても振り返り討ちにするだけだ。

「志貴く、せつちゃんを見たって？」

「あ、あのお嬢様。何故私は男物の扮装なのですか？」

妹分達の声に振り返ると、そこには新撰組が着ていたであろう着物に着替えさせられた刹那がいた。

うん、似合ってる。というか似合い過ぎていて怖いぐらいだ。

「似合とるよな志貴？」

「実際新撰組にいそうだよなこんな奴」

「……………」

流石に言い過ぎたか？

頭を下げて肩を震わせている刹那を見て、何か嫌な予感がする。

泣かせてしまった事に対する嫌な予感ではなく、自分の身に何か起こりそうな嫌な予感。

「お嬢様、志貴さんも着替えさせましょう」

「それは良いアイデアやせつちゃん！」

「いや、一応先生が遊んじやいけないんだが」

新田先生から許可が出ているが、この場を何とか逃げ出す事為に立場を利用するが、

「私も着替えたんですから、志貴さんも着替えないと不公平です！」
「諦めよな？ 志貴」

この二人を前には無理だった。

刹那 side

剣の道に生き、お嬢様を守る役目に就いた私だって女だということに、志貴さんの発言に苛立ちついやってしまった。

何度も嫌がる志貴さんの服をお嬢様と一緒に脱がし、新撰組の服を着せて、

「お前ら、後で覚えてろよ」

凄い形相で睨まれています。

だって男物の服を着た私に、似合うなんて言う志貴さんが悪いんですよ。女の子の気持ちが分かってないというか……。

あ、でもそれは女の子の人にモテないって事だからいいのかな？

「志貴も似合とるで？」

「問題はそこじゃねえんだよ木乃香。こんな姿を教師の誰かに見られたら、後で何を言われるか」

「そないな事言わんで、こっちこっち。ホラホラ色々売ってるえ」
「はあ……」

マイペースなお嬢様を前に、流石の志貴さんも反論出来ないみたいです。

お土産屋さんで三人揃って何を買おうかと見る事に。

「せつちゃんせつちゃん」

「はい？」

お嬢様に呼ばれ、そちらを向くとそこには、

「ふおれ甘食」

「ぷっ」

口一杯に大福をくわえたお嬢様が。

うぷぷっ、笑ってはいけないのでしょうかが思いもしない出来事に私の腹筋は。

「く……す、すいませっ……………」

「へへへ。せつちゃんがやっとなめてくれた」

ゴツッ

笑っていたお嬢様の頭に志貴さんの拳骨が落ちた。

「くわえながら喋るな、阿呆が」

「痛いわ」

まあ確かにさっきのお嬢様は行儀が悪い。それにしても痛そうです。

私もくらわないようにしないと。

それから土産物屋を見ていると修学旅行生でしょうか、制服を

着た女生徒達に写真を撮っていいかを聞かれた。

あまりの出来事に固まってる私を余所にお嬢様が手を上げる。

「志貴も一緒に撮る？」

「そうですよ志貴さん、一緒に撮りましょう！」

言葉とは別に“助けて下さい”と視線で訴えてみる。

「チツ……今回だけだからな」

え、もしかして理解してないんですか？

まず最初は三人で撮り、次は志貴さんと付属の刀で打ち合ってる姿を撮られた。

ちょっと恥ずかしかったが、楽しかった。思えば私はずっとずっと三人でこんな風に遊びたかった気がする。

この時間が続けばいいのだけれど。

志貴 side

修学旅行生と分かれて数分、何やら遠くから蹄の音がする。ようやく奴らの登場という事か。

待ちわびたぞ。

刹那が近くなつた音に気付き振り向くと同時に、馬車に乗った二

人が現れた。

「お……お前らは!？」

「どうもー神鳴流です」

「同じく神鳴流です」

いや、分かつてはいるけどそこでその名前を出すなよ。

「じゃなかったです……その東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます」

「ウチはそれに仕えるメイドです」

月詠は原作通りの洋服、伽具夜は言葉にした通りメイドの格好をしていた。

「そこな剣士はんら、今日こそ借金のカタにお姫様をもらい受けに来ましたえ」

どうでもいいがお前らはその格好で刀を振るのか？

いつもの格好がアレだから違和感ないが、今回は合わせて剣を振ったらしいのに。そう思いながら出方を窺う。

「な、こんな場所で何のつもりだ」

「せつちゃん。これは劇や劇、お芝居や」

理解してない刹那に耳打ちする。

「劇に見せかけて誘拐するつもりだろう」
「成る程」

本当にこいつは状況に詰まると思考を止めるな。帰ったらそこを鍛えてみるかね。

「そうはさせんぞ！ 木乃香お嬢様は私が守る！！」

これは俺も言わなくちゃいけない流れか？

うん、集まり出した周囲の人間が期待の目で見てくる。

「はあ……右に同じく。嬢を連れて行きたくば、俺達を倒してからにしておうか！！」

一歩前に出ながら叫ぶ。

既に刹那に抱きついていたら木乃香はこっちに抱きつく事はなく、色々安心した。

このシーンは見られてるんだよな。

「ほな仕方ありまへんな。お嬢様」

「そーおすな」

月詠と伽具夜は手袋を外し、それを俺達に投げてきた。この決闘の合図、どの国のモノだったか。フランス辺りだったか？

「木乃香様をかけて決闘を申し込ませて頂きますー」

「三十分後、場所はシネマ村正門横“日本橋”にて」

今更ながら説明するが、これは月詠の後に伽具夜が言っている。もつと早く説明すれば良かったな。

『ご迷惑かと思えますけど、ウチら……手合わせさせて頂きたいんですー。逃げたらあきまへんえ』

おっとりとした口調で話す二人だが、その瞳は光を失い濁った色をしている。戦いや何かに魅入られた者がする瞳。

『刹那センパイ（志貴はん）』

用心棒は新選組！？（後書き）

次回、ようやく志貴が手札のカードを一枚切ります。
どうかゆっくりとお待ち下さい。

作者でした

用心棒は新撰組！？ 2

志貴 side

伽具夜達から挑戦状を受け、その後出て来た馬鹿共を鎮圧して日本橋へと向かう。

惚れた腫れたに興味がある年頃だっただけのは分かるが、面倒臭い。それでも結局ついて来る馬鹿共と共に日本橋へ向かう途中、刹那が放った式神を使ってネギ坊主の精神体（正確には違うが）も合流した。

「ふふふふ……」

「ぎょーさん連れてきてくれはっておおきにー。楽しくなりそうですな」

『ほな、始めましょうかー志貴はん（センパイ）』

にこやかに笑っている伽具夜と月詠に恐ろしいものを感じた木乃香が俺達の後ろに回る。

心配をかけさすまいと刹那が笑いかける。

「安心してください、木乃香お嬢様。なにがあっても私がお嬢様をお守りします」

木乃香の頭に手を置いて撫でてやる。

「何の為に俺達がいると思ってるんだ。ちゃんと守ってやるよ」

そう言っていると周囲から拍手と歓声が上がった。……自分の首を絞めちまったか。

おいタマモ、嫉妬して頭をガジガジ噛むな。

とにかく勘違いしている雪広達に対し、伽具夜達は式神を大量に展開する。

この乱戦に乗じて木乃香を奪われないよう刹那はネギ坊主の精神体を大きくし、俺はタマモに命令する。

「ネギ坊主と一緒に木乃香を守れ」

「嫌です。何で私があんな小娘を守らないといけないんですか？」

「守りきつたら膝枕してやる」

「いえ、私がご主人様に膝枕したいです！」

お前の膝の方が辛くないか、という台詞は飲み込んだ。本人がこう言ってるんだからされてやるか。

「それでいい。だから木乃香を頼むぞ」

「忘れないで下さいね」

守りきれたらな。

元の姿に戻ったタマモをネギ坊主達につかせ、伽具夜と向き合う。さて戦うとするか。

得意の投影で創るのはいつも使う七夜ではなく、最上大業物に列せられた虎徹の一振り、長曾祢虎徹入道興里を創る。

その造りは、刃長27.8cm 反り0.0cm 重さ342g
先重0.9cm 目釘穴1個、特殊な造り込みの厚重な短刀だ。

創り慣れた七夜ではない為イメージは強くないが、そこは虎徹として知られた歴史でカバーする事で防ぐ。

「興里の短刀とは珍しい物をお持ちで」

「こいつを見付けるのにかなり時間がかかったがな」

ながそねおきさし

雑学だが、“虎徹”とは甲冑師・長曾禰興里の刀工時代の入道名のひとつである。“虎徹”の方が“興里”に比べて定着していることを考えると間違いとは言いつれないが、厳密に言えば入道名を呼び名とするのは正しくない。刀工名としては興里、あるいは長曾禰興里と表記することが最も望ましく、刀剣書などでは興里と表記することも多い。

また興里は刀と脇差を造るのに専念し、短刀を造るのはかなり珍しいのだ。

示し合わせた訳でもないのに俺達は同じタイミングで地を蹴って斬り結ぶ。

前と同じように太刀を受け流し、小太刀を受け止める。

神鳴流みたいに得物に気を通して強化したいが、魔力で創った虎徹に気を通そうとすると虎徹が崩れてしまう。かといって魔力で強化しようものなら、強度の高い別の物を創った方が効率が良い。

「だけど短刀の神具なんて知らないからな」

「何を言つてはりますの？」

虎徹に罅が入り、砕けた。

両腕を抑え込んで腹を蹴って距離を離す。

次の武器は……… ネタで強いアレでいくか。小声で詠唱する。

「オル・オルクク・オルクス」

周囲の人間は伽具夜達が放った式神に目がいつてる。気付いてるのは目の前の伽具夜だけだ。

「それは剣と呼ぶにはあまりに無骨。斧と呼ぶにはあまりに精緻」

形になる前から己の存在を周囲に認めさすかのように、俺のイメージが唸り声を上げる。

その鳴き声はまさに魔獣。

全てを喰らわんとするかのようについたてる。

「断裂の一点においては、もはや究極とも呼ぶべき最強の――
工具――！」

一際鋭い唸り声を上げて“チエーンソー”が姿を現す。

あ、伽具夜の目が点になってる。

「……それは何の冗談ですのん？」

「冗談かどうかは試してみるか？」

もう一度斬り結ぶ。するとチエーンソーは紙でも斬り裂くかのようには太刀と小太刀を破壊した。

このチエーンソーが登場した世界ではミスリル銀で造られているらしく、これに勝つにはオリハルコンを用いるか、ミスリル銀の精霊を連れて来なければいけないらしい。恐ろしい武器だ。

「あらら、ウチの得物が……」

「まだ得物はあるのか？」

「それが無いんよ。せやからこれまでにさせてもらいます」

言っている事はどうやら本当らしく、伽具夜は素早く身を翻して

逃げていった。

追いかける理由はないな。

タマモ side

ご主人様に言われたので小娘を守ってます。敵の攻撃は小賢しいものが多く、イライラするので炎天とか使いたいんですけど使ったら怒られちゃいますよね。

使えば守りきれるんでしょうけど、それでご主人様を怒らせてしまつては意味がありません。

なんとしても小娘を守りきり、ご主人様に膝枕するのです。それで耳搔きとかしちやったりして。

それにしてもあの童、敵に誘導されてるって気付いてないですね。注意すべきかとも思いましたが、止めておきましょう。こつちを誘導するという事は、敵の本隊が待ち受けてるという事。ならば乗り込んで倒すだけです。

隠れようと城の中に入って長い階段を駆け上がる私達。そこで待ち受けていたのは小娘を攫おうとした猿の女に、女の式神、無機質な小僧。

あの小僧は要注意ですね。

「まさか木乃香お嬢様だけでなく、タマモはんも来るとは……」

「何度も言いますが、私はご主人様に仕える為に存在しているので。この身全て。だから貴女達に崇拜されるなんてまっぴらごめんですね」

「相変わらず志貴はんが好きなんですな」

当たり前です。

今まで私が知り合ってきた男性の中で一番好きな人がご主人様なんですから。

「おや、そっちの坊や何でここに？ 小太郎が閉じこめとるはずなのに……はは〜ん。読めましたえ」

猿の女だって呪術を使うはずなのに“読めましたえ”なんて、まるで呪術があまり得意じゃないみたいな言い方ですね。
式だと見抜けなくせに、何でリーダーなんでしょう。

「あんた実体ちゃうな。って事は手も足も出ん役立たずや」

実体があっても壁ぐらいの役になりませんが。
さて、どうしましょう。

志貴 side

伽具夜を退けたはいいが、どうしたもんかね？

この後は刹那が木乃香を庇って矢を体で受け止めるんだが、まだ月詠と戦っている。

とりあえず欄干の上に乗って見学する。手助けしてもいいけどつまらん。

観客が城の上にいる木乃香達に気付いて声を上げる。

それと同時に縮地で刹那と月詠の間に割り込み、月詠を殴って橋から落とす。

「志貴さん!？」

すぐさま刹那を抱え、木乃香達がいる城の屋根へと向かう。刹那が何か言ってるが無視だ。

「――!!」

なんか女が叫んでるが無視だ無視。じゃねえと矢を放たないだろ？ふん、やはりフェイトの奴は来ていたか。しかも石の槍をタマモ目掛けて構えている。タマモはお前らにとって、崇拜する対象じゃなかったのかよ。

空気を足場にして一息で跳ぶ。

同時に突風が吹き荒れネギ坊主が体勢を大きく崩し、それに反応した式神が矢を放つ。

もう一度跳びたいが刹那がいる状況ではワンテンポ遅れる。だから俺は刹那を木乃香と矢の間に放り投げた。

「志貴さんの馬鹿あつ!!」

俺に文句を言いながらも刹那は木乃香の楯になり、その身で矢を受け止めた。

屋根から二人が落ちるのと同時に、屋根の上に立つ。

タマモが泣きそうな顔でこっちを見てくるが、リアクションして暇はないんだよ。

とりあえずお返しとしてナイフを投影し、矢を放った式神の点へ目掛けて投げる。点に刺さった事で式神は霧が晴れるかのように消えた。

「俺の妹分によくもやってくれたな？」

殺気を全開にするとフェイトが直ぐに反応し、石の槍を飛ばしてきたが簡単に殺す。

「今日は顔見せで済ませるけど、次会ったら殺すからな」

敵対する意思がない事を示し、タマモを抱えて刹那達の下に飛び降りる。

これでフェイトがネギ坊主じゃなく、俺を危惧してくれれば俺とフェイトが戦うフラグなんだがな。

用心棒は新撰組！？ 2（後書き）

志貴が切ったカードはチェンソーではありません。始動キーが切ったカードです。

まあ、あのチェンソーでもいいんですけどね。元ネタ知ってる人はいるのか？

最初は真面目に戦ってたのに、なんでネタに走ってしまったのか

.....

帰りたくないんだが

志貴 side

映画村の一件から俺達はすぐに関西呪術協会総本山へと向かう事にした。原作通りに朝倉達の阿呆がついて来てる。

一応、後で説教しないとな。

「私が懲らしめてやりましょうか？」

「これも予定の内だ」

あれからタマモは耳と尻尾を隠した状態で俺達について来る事にした。子狐状態でも良かったんだが、一度姿を見られてる為戻る必要はないだろう。人前でも人の姿になれるのが嬉しいのか、タマモの足運びが軽い。

総本山の正門にたどり着くなり、阿呆どもが走って先行し、ネギ坊主達が危惧するが何て事はない。

後から遅れて俺達も入ると、二列に並んだ女性達が出迎えをしてくれた。

「木乃香お嬢様、志貴様。お帰りなさいませーッ」

昔住んでいたとはいえこの家の者じゃないんだから、俺の名前を出して出迎えなくていいんだけどな。

まあ翁に迎え入れられ、長に養子縁組みを提案され、タマモを式に下したから無理なんだろうけどよ。

「志貴様、ようやく近衛家の者になる決意を――」

ふざけた事をぬかす使用人の頭にペットボトルをぶつける。何度

も言うが、俺は近衛家に入らないっての。
馬鹿のせいで後ろにいる朝倉とかが興味津々って顔してるじゃねえか。

「もしかして両儀先生って、近衛の許婚なの？」

「違う。木乃香の父親が俺を養子にしようとしてるから、近衛家の者扱いされてるだけだ」

「いいえ、行く行くはこの家の跡取りになってもらいます。長もそれを望んでいるですよ？」

「俺は縛られたくないんだよ。誰にもな」

復活した使用人にタマモが攻撃しようとしたが、その襟首を掴んで踏みとどまらせる。

「それより、こんな事してる場合じゃねえんだ。さっさと長と会う準備をしろ」

「はい、かしこまりました」

俺の言葉で木乃香やネギ坊主を囲っていた使用人達がすぐに中へ案内する。それに続いて俺達も中へ行く。

もう、この屋敷に来ないつもりだったんだがな。

謁見の間へ行く途中、かつて俺が住んでいた離れが見えた。主を失って誰も住まなくなったはずなのに、掃除はしっかりとされているらしく昔のままだ。

そして謁見の間に着く。

敷かれた座布団に座り、長が来るのを待つ。俺としては逃げ出したい気分なだけだな。

ギシギシ、と軋む音の方を向くと目の前の階段から関西呪術協会の長、近衛詠春が下りてきた。

「お待たせしました。ようこそ明日菜君、木乃香のクラスメイトの皆さん。そして、担任のネギ先生」

どうでもいいが長、少しやつれたか？ 肌の色も少し悪いし。ただでさえ細いんだから、ちゃんと栄養を取れよな。

久々に会えたからか、木乃香が長に抱き付く。おい、何でそこで俺を見る。俺は抱き付かんぞ。

「東の長、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門から西の長への親書です。お受け取りください」

「確かに承りました」

さてこれでまた一つイベント消化と。

木乃香が帰ってきたからか、それとも木乃香が友人を連れてきたからか、宴が始まった。

宴の名に恥じぬよう、皆して大騒ぎだ。俺は騒がしいのが嫌いだから皆から離れてタマモと一緒に飲んです。飲んでもって、ノンアルコールだ。

壁に背中を付けて騒いでる連中をただ眺める。

入りたくはないけど、惹きつけられる。

「ご主人様、ご主人様にはタマモがいますよ」

「寂しい訳じゃない。ただ元気だよな、と」

「確かに元気ですね……………あれが若さですか」

タマモが言うのと突っ込めないな。なんせタマモは神の人格の一つなんだから。

しばらくタマモとひっそりと舌鼓を打っていると、長と木乃香がこっちにやってきた。

「若者が何を黄昏でいるのですか」

「あの輪の中に入る資格がないからな」

「志貴に資格がないのは何でなん？」

長は知ってるだろうが、木乃香はきつと知らないだろう。俺が殺人鬼だという事を。

ドサツ、と横に木乃香が座る。

「志貴に資格がなくて、輪の中に入れないんやったらウチらが志貴の周りで輪になるえ」

「木乃香の言う通りですよ志貴。貴方は一人ではありません」

「そうです。ご主人様には私があります」

とりあえず木乃香とタマモの頭を叩く。よくもまあ、こんな恥ずかしい台詞が言えるもんだよな。

長が目の前に座る。長ともあろう者が、下座の方に座るんじゃないかねっての。

「それで志貴、養子の事なんだけど」

「何度も言っけど答えはノー、だ。俺は縛られたくはないんだよ」

「……………そう言うと思ってました。下の者に君をいい加減養子にしたらどうだ、と聞かれるんですよ」

「長としてはどうなんだよ？」

「まあ、私としても養子縁組みしたい気持ちです。息子とキャッチボールをするのが私の夢でしたからね」

「ウチじゃ不満なんや」

「木乃香が生まれて嬉しいですよ。ですけど男親としてはやはり息子とキャッチボールするのが夢なんです」

何か木乃香と長がケンカをし始めた。この隙について逃げ出すとしよう。

タマモはまだ料理を食べたいらしいので、俺一人で宴会から逃げ出す。

長い廊下を歩きながら夜空を眺める。空には青白い光を放つ月が孤独に浮かんでいた。

この後襲撃され、木乃香を取り戻しに行く訳だが今回俺がする事は――

刹那の仮契約阻止

召還された鬼達の殺害

――の二つかね。

まず仮契約阻止する事で、ネギ坊主の魔力をいくらか温存させる事ができる。そして、今回の目玉がやはり召還された奴らを殺す事だろう。今まで我慢していた分、それを鬼達にぶつける。

やるべき事を確認していると、刹那が近くに来ている事に気付か

ないでいた。

「こんな場所で何をしているんですか？」

「おいおい、こんな場所ってのはないだろ」

何もない廊下だからこんな場所で合ってるかもしれないが、此処は関西呪術協会の総本山なんだぞ。

刹那が横に並び立つ。

「それで刹那こそ、何をしにきたんだ？」

「志貴さんが気になっただけです。いつも一人でいるからまた、私達の前から消えてしまいそうで」

「今は翁に買われてるから前みたいに、急にいなくなりはいしな」
「……………やっぱり、此処には帰りたくなかったのですか？」

その質問こそが、刹那がああ宴会から抜け出した理由だろう。

一緒に月を見ていた刹那は今、ただ俺の横顔を静かに見つめている。

「まあ、好き好んで帰りたくはなかったな」

此処に帰ってくれば必ず関西呪術協会の者と顔を合わせ、跡取りになってほしいと嘆願される。更には長から養子縁組みの話もされるしな。

何度も断っているのに、全員して俺の言葉に耳を貸さずに一方通行だ。

「九尾の狐を式神にしまった以上は仕方ないですよ」

「俺の実力でないにしろ、か？」

「過程が大事ではなく、結果が大事ですから」

その意見には賛成だが、この場合は賛成しかねるな。

この物語に参加する為とはいえ、何で俺はあの場で翁と出会ってしまったのか。そしてタマモを式神に下してしまったのか。あそこでもし翁が俺の言う事を聞いてくれたら、タマモと契約出来なかったら、俺はどうなっていたのだろう。

過去なんか興味なかったのに、今では何故かそう考えてしまう。此処が……始まりの場所だからだろうか？

「いなくなりましたら、今度は追いかけますから覚悟して下さい」

「だったら木乃香の護衛はどうするんだ」

「お嬢様も追いかけるそうですよ？」

「マジかよ……………勘弁してくれ」

タマモだけでなく、木乃香と刹那が追いかけるとなると逃げにくくなるな。

「なので覚悟してくださいね———ですから」

最後は小さくて上手く聞こえなかった。

帰りたくはないんだが（後書き）

長の口調がイマイチ分からない……………

久々にこつちを書いたので感覚が掴めません。

もう少し早く更新出来るようにしないとな

お風呂パニック(前書き)

お待たせしましたようやく更新です。 気付いたら2ヶ月放置してたんだー

お風呂パニック

タマモ side

宴会が終わった後、私は大浴場で湯浴みをしています。映画村でけっこう走ったものだから汗をかいて気持ち悪いし、砂埃が髪や尻尾に付いてゴワゴワして嫌な気分です。

うつ、自慢の毛並みが……………。

ご主人様に手触りが良いと言われた以上は常に綺麗にしておかないと。これからもご主人様に撫でてもらう為に。

九本もある尻尾を洗うとなるとリンスなどが凄く速度で無くなるので、侍女が大量に渡してくれて気配りは嬉しいのですが、各十個も必要ないと思うのですが。

すべて洗い終えるなり尻尾を消して湯船に入る。

本当は尻尾を出して入りたいのですが、それだと毛が抜け落ちた時に問題になって怒られるんですね。どこかで尻尾を伸ばしながら温泉に入りたいです。あ、もちろんご主人様と混浴で。

湯に浸かっていると小娘二人が入ってきました。桜咲刹那と…………… 神楽坂明日菜でしたっけ。

「あ、タマモさんも入っていたんだ」

「お邪魔します」

神楽坂の方は見るからにあの童側ですが、刹那の方は明らかにご主人様を見ているので敵です。とはいえあからさまに嫌悪しているはご主人様に怒られてしまうので、表には出しません。

二人は体を洗うなり湯船に入ってきました。

「両儀先生の式神がタマモさんなんだよね？」

「ええ。西洋風に言うると使い魔です」

契約の仕方は完全に西洋でしたがね。あの女神が用意した羊皮紙にサインさせるだけで契約させてしまうんですから。

「その……………契約する時にキス、したんですか？」

「な！？ 志貴さんとキスしたんですかタマモさん！」

えーと……………小娘達の話からすると西洋魔法使いと契約するにはキスが必要という事でいいんでしょうか。

「神楽坂、その話を詳しく聞かせなさい」

事の次第によつてはご主人様に再契約しなければならなくなりますので。

「……………という訳です」

「そんな契約方法があったとは」

「良かった。キスしてないんですね」

これはご主人様だけでなくあの女神にも問い詰めなくてはなりません。そして一度契約を破棄して再度契約をしてもらわねば。

ふふ、これは楽しみが増えました。

という事は神楽坂はあの童とキスをしたという事、あのような年端もいかない童とキスをするなんて犯罪ではないでしょうか。どうせあのオコジヨ妖精だかの差し金なんでしょうが。

「にしても広いお風呂よねー」

「一般家庭のお風呂と比べるとやはり大きいですよね」

そうでしょうか。ずっとずっと昔、仕えていたあの人が住むお屋敷ではもつと広い湯船があったのですが……………あの人が住む世界と一般世界を比べるのは間違いでした。

「なんか刹那さんってお姫様を守る騎士ってカンジだね。ただのボデイガードっていう関係じゃないってゆーか」
「なっ、そそそんな関係じゃありませんよ！」

話は気付くと桜咲の木乃香に対する思いの話になっています。こういう話は女の子の特権ですが、ご主人様が関わってない話は興味がありません。

加熱した二人がお風呂で暴れ始めたので、氷天で凍らせました。ゆっくりと頭を冷やさない。

志貴 side

はあ、何で俺まで風呂に付き合わなくちゃいけないんだよ。俺は長に連行されてネギ坊主と一緒に風呂へと向かっている最中なんだが、どうにかして逃げ出せないか画策しているがその都度首根っこを捕まれて逃走に失敗している。

昔住んでいた離れの風呂で十分なんだが、そう言っても長は聞く耳を持たないだろう。

諦めて風呂に入るとしよう。

「長さんも傷だらけなんですね」

「これですか？ これは昔戦いに身を投じていた名残ですよ」

だから何でネギ坊主は傷に反応するんだ。あれか、傷が格好良いとかがいう夢見る少年なのかね。

こんなもの温泉街に行った時にヤクザ扱いされてのんびり出来ないだけなんだが。

「ネギ君は落ち着いていますね。これなら十歳で先生だと言つのも頷ける」

「いえ、そんな」

刹那と神楽坂がこの後隠れるんだが、何でタマモも風呂にいるんだよ。これはタマモ相手に風呂場でのパニックを演じないといけないのか？

俺達が来た事に気づいたらしく三人が慌てて隠れたのを確認してから戸を開ける。よし、なんとか隠れたみたいだな。
湯船に入る前に体をしっかりと洗っていると――

「志貴、背中を洗ってくれませんか？」

――いきなり長がそんな事を言ってきた。

「じゃあ僕は志貴さんの背中を洗います」

「ちよつと待て、俺は洗うなんて一言も言っていないぞ」

「ほらほら志貴さんも座ってください」

多勢に無勢。仕方なく長の背中を洗い、ネギ坊主が俺の背中を洗い始める。

「息子に背中を洗ってもらうのが夢だったんですよ」

「だから俺は息子じゃないっての」

「えへへ……僕はお兄ちゃんが出来たみたいです」

この二人といると調子が狂う。

殺人鬼の俺にはこんなアットホームな関係はいらないってのに、何で逃げ出せないんだよ。これだから帰ってきたくなかったんだ。背中を流し終えて湯船に入ると、今日一日の疲れが取れるような心地よい気分になる。

「志貴さん。あのお猿のお姉さんの目的は何だったんでしょうか？」

「お猿？」

「天ヶ崎千草の事だ。奴は西洋魔術師に恨みがあるから、切り札として木乃香を狙ったんだろうよ」

奴は何で西洋魔術師を恨むんだっかな。家族を西洋魔術師に殺された、学会のような場所で手柄を西洋魔術師に奪われた、勢力争いに負けた、色々考えられるがやはり家族を殺されたのかね。どうだって良いが。

「木乃香さんが切り札ですか？」

「あの子には凄まじい呪力……魔力が眠っています。それは君のお父さん、サウザンドマスターをも凌ぐ程です」

「その力を利用すれば東西を手中に収められるとでも考えたか」

長が首肯する。そこまで分かってるならなんで先手を打たないかね。

「ところでサウザンドマスターの事をご存知なんですか？」

「フフ、よく存じていますよ。何しろあの馬鹿とは腐れ縁の友人でしたからね」

「え……」

そついや腐れ縁の理由も知らないんだよな。俺がこっちに転生した後、漫画で書かれてるんだろうか。

他愛のない会話を続けていると、他の生徒達がついにやってきた。この後を考えると胃が痛くなるな。

「緊急事態ですネギ君！」

「裏口から脱出するからついて来い！」

「えっ、あの二人とも!？」

やはり水の中に下半身が浸かっているから動きにくいな。縮地で一気に逃げ出したい気分だ。

そして、裏口から逃げようと置き石の近くを駆け抜けようとした時に起きた。

隠れて慌てている刹那とタマモが何を思ったか俺の方へと出てきて、それを何とか躲そうと身を捻るが場所が悪く水に足を取られて二人に押し倒されるような形で倒れてしまった。俺を挟むように右にタマモ、左に刹那。

何が起きたか二人が気付くと同時に、戸が開いて生徒達が入ってきた。

『キヤーっ!』

「志貴、何をやってるん？」

「落ちて着け木乃香、お前は少し勘違いをしているんだ」

だからその背中に阿修羅が視えるほど強大な怒気を抑えてくれ。

「ご主人様、こんなところでなんて……」

「……志貴さんのエッチ」

「お前らは何を言ってるんだよ！」

「助平な志貴にはお仕置きが必要みたいやね？　それもキツイお仕置きが」

その手に構えたタライと置き石はなんだ！？

俺の悲鳴がしばらく屋敷中に響いていた、と朝倉から後で聞かされた。

お風呂パニック（後書き）

タマモが段々オリキャラになってきたような……

次回から最低でも1ヶ月に一話ペースで書くつもりです。更新が遅れて申し訳ないです

祭の始まり（前書き）

遅れました。そして地の文が多いという

祭の始まり

志貴 side

あの風呂場のイベントの後、俺とタマモは昔住んでいた離れでのんびりと祭が始まるのを待っていた。詳しく説明すると、タマモに膝枕されている。

こんな姿をあの子供達に見られたら何て言われるか分かったものじゃないが、タマモに約束はした以上はされてやらないとな。俺は殺人鬼だが、約束を破るのは人でなしのやる事だからな。いや、殺人鬼の時点で人でなしか。

「はあうゝ、幸せですよゝ」

枕も喜んでるみたいだから良しとしよう。

しかしどうでもいいんだがタマモが着ている服の構造上、俺の頭が乗る部分はタマモの生太股になり、ちよつとだけ熱い。

このまま物語通りに進むなら、本山のほぼ全てが石になる。戦力を増やすのならアレを投影するべきだが、恐らくアレは一度きりの宝具だろう。それを誰に使うかで悩むのだが、そもそもこの本山に住んでいる者達の中で戦力になる者はいろのだろうか。長ですら石化するのだから、アレを投影するだけ魔力の無駄だろう。

そこでふと思った。

俺が敵の立場ならば、先ずは俺をどうにかするべきではないか。タマモという強力な式神を持ち、直死の魔眼を持つこの俺を。正攻法ではタマモを倒すのは不可能、かといって裏から攻めるにしてもタマモの手はこの本山全てを握っている。ならばどうするか。

本山が襲われたという情報が、俺に届かないようにするしかない。俺が知れば、タマモに命令して守ろうとする。逆に、俺が知らなければ俺もタマモも動く事はない。この事から考えるに、敵はこの離れに外界との接触を立つ結界を張っているのだろ。

「タマモ、感じるか？」

「ご主人様が考えているとおりの物が、この離れで作動しています」

既に作動しているなら敵はもう動き出したか、今から動くかだろう。

「破壊するのにどれだけの時間がかかる？」

「十秒もかかりませんよ。……ほら、この通り」

ガラスのような硬質な物が砕けた音が響き、ほんの一瞬だけ世界がブレる。それが結界の壊れた音だと理解するのにちよっと時間を要してしまった。

やはり、こういう場面においてタマモは役に立ってくれる。

膝枕と別れを告げ、思考を殺し合い用に変えて立ち上がる。宴の気に当てられたようで、少し目眩がした。

「さあ、祭の始まりはどんな悲鳴（音色）を奏でる？」

本邸の方へと戻ると、どうやら長は既にやられていたらしく何時も以上に慌てているネギ坊主と刹那と出会った。どんな状況かは分かっているのだが、一応は状況を聞いておく。その内容と俺の知る情報は全く変わりなく、無駄に時間を使っただけに終わった。

もしかしたら伽具夜が来ているかも、と思ったがアイツは戦う事に特化している為、この場に現れるという事はないか。そこから考えを進めると、襲撃してきたのはフェイトだけになるが、それはつ

まりフェイトにはタマモと戦っても生きて帰れる自信があるという事ではないだろうか。

俺というイレギュラーが現れた事で、敵側のキャラが強化されたのかもしれない。だが、それだと伽具夜が存在が分からなくなる。

「考えても分からないなら、敵に聞くしかないか」

「敵に聞くしかないか、って何を聞くんですか志貴さん？」

「真意とかを、な」

理解出来ないという顔を刹那がするが、言ったところで理解は出来ないだろう。何せ、御伽噺のような話なんだから。

「ちなみに神楽坂達との待ち合わせ場所はどこなんだ？」

「さっきのお風呂場にしました」

確かにそこなら互いの心に強く残っている為、初めて来た本山であつても迷わずに合流出来るかもしれないが、ある意味密室という状況かつ、フェイトの転移に使う水がある場所の為間違いだ。後者は知らないから仕方ないとして、前者の場合だと外の状況が分からないまま風呂場事やられても可笑しくはないんだがな。

全員思う事があつたのか、無言のまま風呂場にたどり着いた。そこには裸になった神楽坂が横たわっている。裸、という事に少し変な想像をした二人はフェイトが背後に現れた事に気付かない。気付いているのは俺達だけだ。

魔力を込めた右腕で殴りかかるがフェイトは左手で抑え、空いた右手でカウンターを狙うがその右手は魔法陣に捕らわれた。

タマモの魔法だ。

心の中で感謝しつつ、フェイトを殴り飛ばす。防御の魔法を使わず何故殴られたのか気になるが、その当人が大したダメージもなく立ち上がった事に、防御をするまでもなかったのだと理解する。や

つまりこのレベルともなると、俺の魔力ではどうともならないのか。

「九尾の狐という強大な式神を持つておきながらこんなものなのかい？ 両儀志貴」

「今のが全力だと思うなよ、人形」

「なに？」

人形、その言葉に冷静が売りのフェイトが反応する。この時間軸においてフェイトが人形だと知っているのはいないはずだが、それがあるとなればフェイトでも冷静さを崩すというもの。そしてそれが、俺の望んだ隙だ。

俺と入れ替わりにネギ坊主が前に立つ。

お前と戦うのは俺ではなく、ネギ坊主でなくてはならない。未来を知っているというアドバンテージを失わない為にも、俺はあくまで脇役だという事を敵に、世界に知らさなくてはならないのだ。

「皆を石にして、木乃香さんを攫って、明日菜さんにエッチな事まですて……！」

先生として……友達として……僕は……僕は……お前を許さない
「……」

吠えるネギ坊主に対し、フェイトは冷静に言う。

「……それでどうするんだい？ この僕を倒す、とても言うのかい？

止めた方がいい。今の君では僕に勝てはしないよ」

欲しい者が手に入った以上、このまま戦うのは得策ではないと考えたのかフェイトは水にとけるかのように転移した。

「神楽坂はさつさと着替えてこい。着替えが終わり次第行くぞ」
「え……きゃああああ!？」

こらタマモ、俺が神楽坂の裸なぞ見ていないのが分かってるのに
何で頭を噛む。それも甘噛みじゃなく本気で噛むな。

窓を開けて夜風を浴びる。

風呂場の熱く湿った空気で汗をかいた体を、冷たい風が肌を刺す
かのように吹き抜けていく。

「なあ、志貴のアニキ。勝つ気満々なところ悪いんだけど、俺っち達
に勝てる見込みはどれだけあるんスか？」

あのフェイトを前にしたらそう思うのは仕方ないが、一応参謀で
あるお前がそんな事を口にするのはいただけないな。俺が殺人鬼じ
やなく、普通の人間だったなら力モと同じように思ったかもしれない
けどよ。

「天ヶ崎千草は雑魚だが、あの子供がどう動くかによって戦力の差
が決まる……………だけど負けはしない」

「ご主人様と私がいる限り負けは絶対にありえません!」

物語通りに進めている以上、俺達の勝ちは堅い。だけど伽具夜の
全力が分からないこの状況では、あまり樂觀してはいられないよな。
神楽坂が着替え終えたのを確認し、奴らの追跡を始めた。

山の奥深くにある川に奴らはいた。だが、伽具夜はここにはおらず天ヶ崎とフェイト、式神が二体しかない。

「そこまでだ。お嬢様を返せ！！」

「……またあんたらか」

投降するように刹那が言うが、木乃香という人質がいる状況で投降するような馬鹿ではない。前みたいに人質を楯にしてフェイトに攻撃させるのが、向こうにとっての最善だ。だから投降など無意味でしかない。

「あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ。本山でガタガタ震えてれば良かった、と後悔するで」

「ふん、滑稽ですね」

「……何が言いたいんやタマモはん」

「今から見せるのは小娘の力であって、貴女の力ではないというのにあたかも自分の力のように振る舞う貴女が滑稽だと、私は言うてるんですよ。盗んだ冠を被って女王様気取りですか？」

確かにタマモの言う通り、天ヶ崎がやっている事はかなり見苦しい。自分に足りない物は余所から持ってきて補えばいいが、奪って補うというのは美しくない。悪としての美学がない悪なんてただの犯罪者だ。

「もうあんたらに用はあらしまへん……………オン」

天ヶ崎が呟くと川の底から幾つもの光が飛び出した。

さあ、始めようか。殺し合いをよ。

祭の始まり（後書き）

この後の流れとして志貴は、刹那達と残るか、ネギと共に行くか、の2つなのですがやはりネギと一緒にがいいでしょうか？

前者なら沢山殺せますが、スクナとの戦いへどう間に合わせるかが問題。

後者なら私自身物語を書きにくいですが、話の整合性を取りやすい。

という二択なんですよ。さあ、どうしましょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9210m/>

不条理には殺人鬼を

2011年9月2日14時27分発行